



挨拶

はじめまして。私、当雑誌の編集者をさせていただきます、享楽と申します。まずは、当雑誌をお読みいただき、誠にありがとうございます。

この雑誌では、紹介文にもあるように、作家さんが書きたいものを書くということをコンセプトに活動を行っております。また、常時、作家さん、および、挿絵を描いてくださる方を募集しておりますので、企画に参加してみたいという方は、是非お気軽にご連絡ください。ご意見、ご質問也大歓迎です。

連絡先

kyourakunatuhiko@gmail.com

縦書きでお読みにになりたいという方のために、別途PDFを作成しております。

こちらのURLからダウンロードして、お読みください。

<http://www.mediafire.com/?fzq0tavje2rtpe8>

「参加してみたいけど、自分の実力でもいいのか...」と考えている方、そんな心配は必要ありません。

当雑誌は、書いた作品の公開の場としてご利用いただけます。素人の、素人による、素人のための雑誌、と言えば少々大げさかもしれませんが、せっかくお書きになった作品を、人目のつかぬ場所に保管しておくのならばいっそ、当雑誌で公開し、読者の皆さまから評価していただければいかがですか？

あまり長々と文句を並べても、仕様のないことですので、この辺で、私の挨拶を終わりとさせていただきます。

それでは皆様、『道人雑誌』をお楽しみください！

作品について

当雑誌では、連載作品と完結作品、また、各号ごとにテーマを定め、そのテーマに沿った作品も掲載しております。

テーマ作品に関しては、作品一覧にて、横に（テーマ作品）と書いてあります。

今回のテーマは、『風物詩』です。

まだまだ作品数が多いとは言えませんが、ご容赦いただけると幸いです。

1 はじめに

2 目次

3 連載作品

4 完結作品

5 おわりに

作品名

『か！』 hii （テーマ作品）
『駆け落ち』 享楽

「……暑い」

床の上で、今年だけでも幾度目か知れないその言葉を吐きだした。それは反射的に出たものだったに違いない。つい今しがたまで、あたしは夢の中にいたのだから。暑さで目を覚ますと言うのは、この季節に限って言えば珍しいことじゃない。

だるい身体を無理に持ち上げることはせず、首だけを傾けて横を見た。ゴキリと小気味の良い音が頭の中に響く。視線の先には乱れた布団が敷かれていた。

さっきまではあそこに眠っていたはずだ。けれど今は畳の上に寝そべっている。別に普段から寝相が悪い訳じゃない。無意識下のあたしの身体が、より涼しい寝場所を目指した結果に違いなかった。身体中が痛むのは、きっと変な所で寝ていた所為だろう。

次に逆方向に首を回す。今度はポキリと小さく鳴った。開け放たれた障子の向こうでは、高々と昇った太陽がメラメラと燃えている。正午はとっく過ぎているだろう。しかしあたしは特別朝寝坊な方ではない。こんな時間まで寝ていた理由があるとすれば、昨晚なかなか眠つけなかったからだとは思えまい。お陰で貴重な一日の半分を失ってしまった。

あたしは夏という季節が嫌いだ。阿呆見たく暑くて、その暑さにやられるのか餓鬼どもは狂ったようにうるさくはしゃぎまわる。元気過ぎるセミ共の合唱と合わせれば阿鼻叫喚の地獄絵図だ。熱中症にでもなったらどうするんだと気が気じゃない。対してあたしはと言えば、外に出れば肌は焼けるわ歩くだけで普段の倍は疲れるわ、家の中に居ても頭は回らず寝転がるばかり。動く事さえ億劫だ。

とりわけ蚊という虫が大嫌い。どこからともなく飛んで来ては人の血を吸い取って、駄賃は痒みと来たもんだ。思知らずも甚だしい。その上見た目も気持ち悪い。何より厄介なのが夜の羽音で、何を隠そう昨夜眠れなかった原因もそれだ。プ——ンと言う独特の高周波が暗闇の中、離れては近付き近付いては離れ。鬱陶しいことこの上ない。奴らほど害虫と呼ぶにふさわしい虫は、ちょっと他にはいないだろう。

しかもこの夏はやけに数が多い。庭に池がある所為もあってか昔から多い多いとは思っていたが、今年はその比ではない。昨夜の戦いも、どうやらあたしの負けに終わったようだ。くるぶしを二か所、膝の裏、首筋……どれも非常に痒い場所をやられている。対してこちらは敵を撃退した覚えがない。完全敗北と言っても過言ではない。

悔しさが込み上げて来る。あんな虫けらごときに惨敗を喫するとは……あたしはこれでも霊長か！ やつらに思い知らせてやる必要がある。格の違いというモノを。

畳の上を転がって、布団の脇に設置された扇風機のスイッチを入れる。中風に設定された旋風が、ほんの少しだけ暑さを和らげてくれる。しばらくはここから動けそうにない。

しかし昨今の連敗を鑑みると、中々どうして、敵ながらあつぱれなものだと認めざるを得ない。昼間、こちらの活動が活発な時間帯に攻撃してくるのはせいぜい一匹か二匹。そいつらは先遣隊と見るべきだろう。本当の攻撃が始まるのは、いつだって電気を消してからだ。

闇に乗じる。武人としては最低の行為だろうが、これは戦争だ。あたしはやつらの事が嫌いだが、だからこそその生態についてある程度の調べはついている。血を吸うのは[♀]だけで、その目的は子供を産む為のエネルギーを蓄えることだと言う。同情にこそ値しないものの、必死になる理由としては上等だろう。汚い手も惜しみなく使って来るはずである。

そして今、何より困っているのが……。

「やっぱり。なくなってたか」

最後の蚊取り線香が、その役目を終えて燃え尽きていた。

連日の夜襲による弾薬攻め。それがここに来て効いてきている。虫よけスプレーはもう三日前に底を尽いたし、ムヒも使えてあと数回といった所だろう。ここ数日間は儉約に努めてきたが、その所為もあって被害状況は悪化の一途をたどっている。更に最後の広域戦略兵器が尽きたとなれば、今夜はこれを機にと大攻勢を仕掛けて来るに違いない。

つまり今日中にどうにかして武器の調達が出来なければ、あたしはやつらに思うさま蹂躪される事になる。しかしこの「今日中」と言うのが、事他厄介なのだ。

「ちくしょう、太陽め……！」

田舎町故、店は遠い上に閉まるのが早い。つまり必然、買い物をするなら日中家を出ることになるのだが、この夏と言う季節、敵はやつらだけではない。ガラガラ燦々と輝く太陽とかいう恒星が、恐ろしい凶器へと変貌するのだ。熱を発する肌を焼く。これが活発な時間に外に出る事は、自殺行為に等しいとさえいえよう。そしてそれこそが、敵の謀略に気付いていながらも補給が出来なかった理由だ。

虫けらたるやつらがそこまで考えて例の夜襲作戦を実行に移したとは思えないが、しかしそうすると天が奴らの味方をしているという事になる。もしや、神と呼ばれる超常の存在が昆虫類の支援をし、人類を滅ぼそうとしているのかもしれない。

……暑過ぎる所為で、思考が倒錯しているみたいだ。

ともあれ。このまま黙ってやられるあたしではない。意地があるのだ、人間様には。日光の下に肌を晒さず、かつ武器弾薬を補充する策が、一つだけある。

今度は布団の上を転がって、枕元で充電されていた携帯電話を手を取った。ついでに一緒に置かれていた愛用の黒ぶち眼鏡もかける。それから電話帳画面を開き、舍弟その一へのコンタクトを試みた。

『も、もしもし、カユさん？』

従順な後輩は、僅か数回のコールで通話ボタンを押したらしい。いつもの煮え切らない声が、すぐに受話器から漏れてきた。

「おう、カオル。元気か？」

『はひっ！ カユさんもお、おげ……』

「もっとはっきり喋れっての」

しかりつけて、しかし反応が無かったので、更に「男なんだから」と付け足した。

『すみません……』

その上すぐに凹むのだから、仕方のない奴である。

「いいよ、別に。何時ものことだ。それよりちょっとさ、折入って頼みたい事があるんだが」

『なんですか？』

「ああ、今から言うものを買って家に来てくれ」

敵とて複数。一人や二人くらい兵を増やした所で文句はあるまい。今夜こそ、目にもの見せてくれるわ。

一時間程経って。ようやくチャイムが鳴った。扇風機の前からどくのが嫌だったので、大声で呼びかける。

「おー、開いてるから入りな」

「お、お邪魔します」

躊躇いがちな挨拶を携えて、夏だと言うのに生っ白い肌をした美少年が、部屋の中に入ってきた。

「遅かったな、カオル」

「ごめんなさい……って」

カオルは謝りかけて、何故か押し黙った。その視線はどうやら、あたしの身体に注がれているようだ。

「？　どうかしたか？」

「いや、暑いのは分かるけど、その、もうちょっと何か着た方が……」

言われて、自分の姿をみやる。タンクトップに太も丸出しのボクサーパンツ。なるほど、露出度が高い気がしないでもない。しかし。

「別に、お前に見られたところでどうなるもんでもねーよ」

もう十年來の付き合いだ。恥ずかしがったりだのと言うのは今更な話だ。

と、カオルの荷物が足りない事に気が付いた。

「ん？　それよりカオリはどうした？」

カオルに伝えた『もちものリスト』のうちの一つ、彼のちっこい妹の姿が見当たらないのだ。

「いや、あの」カオルは視線を反らして、「何か用があるって」両手の人差し指をクルクル廻しながらそう言った。こう言う分り易いところも、こいつの悪い癖の一つだ。

「嘘こけ。おおかた『この糞暑いのになんで私がわざわざ暑苦しいカユの所に行かなきゃいけないの？』とかなんとかほざいたんだろーが」

自分で言っていて悲しくなってくる程の暴言だが、あの小娘なら言い兼ねない。案の定カオルは「なんでそれを」みたいな顔をしやがるから、完全に図星らしい。流石に軽く傷ついた。

「あんにゃろ、反抗期か？　昔はもうちょい素直だったろうに……」

まあそんなことはどうでもいい。戦力を一人失ったのは惜しいが、相手は所詮虫けら。これくらいのハンデはくれてやろう。とにかく今は、カオルが調達してきた武器を確認するのが先だ。

「スプレータイプ三、設置型四、防御結界(むしよけ)一、回復薬(かゆみどめ)一……少々心許ないな」

ビニール袋から補給物資を出して、一つ一つを手にとってみる。その全てが使いなれた武器だ。どうやらスーパーの商品レイアウトは変更されていないらしい。もっと画期的な新兵器がないかと期待していたのだが……所詮田舎は田舎ということか。

「お小遣い、あんまりなくて」

彼はそう言って、照れくさそうに頭を掻いた。まあ仕方ない。なにせこちらが急に頼んだことだ。暑くて買い物に行きたくなかったという理由が大半を占めている手前、流石のあたしもきつく言える筈がない。この武装で決戦に挑む他あるまい。

「お、アイスも入ってるじゃん」

ビニール袋の中に、紙袋が入っている。ドライアイスを入れる為のものだ。そのドライアイスが何を冷やすためのものかは、想像に難くない。カオルにしては気の効いたはからいだ。

「あ、はい。買っていったほうが喜ぶって……」

ガサゴソと、袋の中を物色する。昔馴染みのソーダ味のものが三本。ん？　三本？

「なんでみつつも買って来たんだ？　つーか買っていったほうが喜ぶって」

誰に言われたんだよ、と言い終える前に、再びチャイムが鳴った。

「入るぞー」

これまた聞きなれた、間抜けな声。急に鼓動が高まった。

「ハヤシ！？」

カオルカオリ兄妹よりも付き合いの長い、幼馴染の声だ。それでいてカオルと違って遠慮のないあの野郎は、すぐさまこの部屋にやって来るに違いない。

「ちょっと待ってろ！」

「なんでだよー？」

無神経な返答を「いいから黙って待ってろ！！」の一声で押さえ、慌ててタンズから引っ張り出したジャージを着る。横でカオルがやたら複雑な表情をしていた気がしたが無視した。後は――布団も畳まなくては。

「もういい？」

「もう入ってるじゃねーか！！」

枕を投げつけるも、ヒョイと避けられた。相変わらず無駄に勤がいい。蚊と同レベルに気に食わない奴め。

「なんでいきなりお前が来るんだよ」

きつく睨みつけるも、これにも動じる気配はない。

「店でカオルと会ってさー。カユン家行っつーから俺もお邪魔しようかと」

聞いて、睨み顔をカオルに向ける。こちらは「ひっ」と小さな悲鳴を上げて、身を縮こまらせた。

「お前はお前で、何故先に言わん」

「だ、だって、言う前に来ちゃったんだから仕方ないじゃないですか」
今にも泣きそうな顔だ。これはこれで何か釈然としないが、かと言ってこのまま責めるのも悪い気がしてしまうのが、こいつの厄介な所である。
「……アイスに免じて許してやる」
なんだか馬鹿らしくなって、氷菓子の包装を開けた。そもそも、何故こんなにイラついているのだろう。それもこれも全部あいつらの所為だ。
「そういえば今日、何をします？ あの買い物だけが用事じゃないんですよね？」
「んー？ 普通に遊ぶんじゃないのか？」
二人もあたしに続いて袋を開ける。アイスは少しかく鳴っていて、早く食べないと棒からずり落ちてしまいそうだ。
「覚悟しておけよ。ここに来たからには全力を尽くしてもらうからな」
フッフッフッと不敵な笑みを演出してみたら、兩人から不思議そうな顔をされた。頬の辺りが熱くなる。あんまりキラに合わない事をやるもんじゃないな。ともあれと咳払いを一つして、あたしは宣言した。
「蚊(むしけら)共の撲滅作戦だ」

時は飛んで夜。奴らの最も活発な時間帯。
「いいのかなあ、こんな時間までお邪魔しちゃって……」
「いいんだよ。ばーちゃんも喜んでたし。大人数で飯食うのも久しぶりだったしな」
「ああ、うまかったなー。晩飯」
腹が減っては戦は出来ぬ。準備は万端。いざ参らん。
三者三様に語らう決戦の地は、窓と障子の開け放たれたあたしの部屋の中。
「あ……こら、変なとこ触んな」
「すす、すみませんっ」
灯りは点けず、一人一つのスプレー(武器)を携え、闇に潜んで敵を待つ。
「こちらはなるべく被害を受けず、一匹でも多く敵を討て。いいな？」
詳細は既に伝えている。あとは意気込みだけでいい。二人の「了解」の言葉の刹那後、あたしは耳に届いたその高音を聞き逃さなかった。
「——来た」

暗闇に乗じる、敵の常套手段。虫よけスプレーの効果のお陰か様子見の旋回をしているが、黙っていれば守護の薄い部分を確実についてくる。しかしそれまでにはいくらかの猶予があるはずだ。
数分間も待つと、羽音があらゆる方向から聞こえて来るようになった。外と部屋を隔てる物はないのだ。敵とて容赦はしないだろう。真っ暗闇での多勢に無勢。これ以上に不利な状況はない。いつもはこれにやられているのだ。しかし今夜は一味違う。この戦場は、こちらが用意したものなのだから。
「カオル、点灯！ ハヤシは着火！！」
あたしは勢いよく号令を飛ばした。電灯が煌めき、煙が立ち昇る。
光りに照らされて、敵の姿が露わになる。狭い空間とは言え、視界の中を点々と飛び回る蚊、蚊、蚊……。なんともおぞましい光景だ。「きめえ……。こんなにいいのかよ」常人とはまるで違う感覚を所有しているはずのハヤシですら怯ませるのだから、相当なことだ。しかしこんなことは作戦の内。むしろこれだけ集まってくれたのは、嬉しい誤算と言ってもいい。

窓の下に一つ、障子の下には二つの蚊取り線香。広域兵器を上手く配置する事で、この部屋と外とは完全に遮断された。まさしく飛んで火に入る夏の虫。低能な羽虫共は、見事なまでに我々の仕掛けた罠にかかったのだ。
「今だ、一斉射撃！！」
声の限りに叫ぶ。三人で背中をくっつける陣形を組み、部屋の中央をゆっくりと回転しながら、蚊専用の殺虫剤を惜しみなく噴射した。
「うおおおおおお！！」
三人の咆哮が重なった。その雄叫びに合わせるように我が物顔で空を飛んでいた吸血昆虫たちが、見る見るうちに畳の上へと落下して行く。最高だ、最高の気分だ！
「ッゲフ、ゲフン！ う、撃ち方やめえ」
むせた。あまりに調子に乗り過ぎたせいで、危うく自分らが死にかけた。流石にこんなアホな理由で死んだら洒落にならん。やはり殺虫剤は用法・用量をよく読んで正しく使うべきだったのだろうか。……まあその分大きな戦果を上げられたのだからよしとしよう。なにせ被害はほぼなし、撃沈数は三桁に届くだろう。
「諸君、我々の勝利だ！」
たった二人の兵たちが、高らかに喜びの拳を突き上げた。

「でもこんなことした所で、蚊はいなくならないんじゃないですか？」
「あ？ なんだって？」
掻き消されてカオルの小さな声が聞こえなかったので、唸りを上げる掃除機を止めた。骸の後始末も予想していなかった事の一つだ。しかしヒートアップした身体を冷ますには丁度いいとも言える。
「いえ、これだけ倒したって、まだまだ出て来るんじゃないかって……」
「ああ、なんだ。まあさうだろうな」
あたしが言うと、カオルは意外そうな顔をした。
「おいおい、あたしだってバカじゃねーんだから。それくらいの事は分かってるっての」
ますます分らない、と言いた気な顔になる。これだから頭が固いつてんだけどなあ。
「だからさあ……」

「楽しかったらろー？ だったらそれでいいんじゃないの？」

「あたしの台詞を取るな！！」

掃除機の柄を振り下ろすも、ハヤシはこれを難なく避けた。本当に気に食わない野郎だ。相手にしていても腹が立つだけなので、気を取り直して再度説明する。

「.....だからつまりな、ストレス解消、鬱憤晴らしだよ。あいつらの所為で眠れぬ夜を送ってたからな。お前も案外楽しんでたろ」

カオルは少し考えてから「ああ、確かに.....」と呟いた。

「さあて、次のアホ騒ぎは夏祭りかな」

ニッと笑みを浮かべる。傍からみたら、さぞ機嫌がよさそうに映ただろう。実際に楽しくて笑っているのだから仕方あるまい。

あたしは夏という季節が嫌いだ。蚊共の存在もあって、大嫌いと言っても良い。この言葉に嘘は無い。

だけど、だからこそ。少しでもおもしろ可笑しく過ごせればいいと思うのだ。

とぷりとぷりと、夏の夜が更けていく。今夜こそは久々に、気持ちの良い眠りにつけそうだ。

続

「ちょっと、そこのあなた、私と駆け落ちしてみない」

顔を上げると、女が立っていた。若くもなく、かといってそこまで老いてもいない。24、5といったところか。

僕は行きつけの小料理屋で飲んでいた。小汚い、安い飲み屋で。赤貧学生身分だ、贅沢はできない。

女は奥の席に座っていた。長いこと、酒を飲んでいた。

女一人で遅い時分に、しかもこんな店に不釣り合いな上等の着物を身に纏っていたため些か不審に思っていたのだから、なるほど、何か訳有りのようだ。

「急なお話ですね」

突然の出来事であるにも関わらず、自分でも驚くほど冷静に対応できた。理由なんてわからない。ただ、気づくと口を開いていたのだ。

「あら、私とじゃ、ご不満かしら」

女が微笑む。

「不満もなにも、僕たちは初対面です。当然の反応でしょう」

些かぶっきらぼうに答えてしまう。しかし女は気にする様子もなく、微笑んでいる。

思わず女から目をそらしてしまう。そのまま、猪口の酒をぐいと飲み干した。

「あなたは一生なにもしなくても自由に遊べる生活を手に入れることができるのよ。いい話だと思わないかしら」

女は凜とした声で、さも正しいのは自分で、間違っているのは僕であるかのように言った。

「なにも心中をしようというわけではないのよ。駆け落ち、それもあなたにはなんの不都合もない。どうかしら」

そういうと女はまた微笑んだ。艶やかに、まるで僕を吸いこもうとしているみたいに。

「駆け落ちだなんて、そんな突然の話には乗れませんよ。第一あなたとは今初めてお会いしたのです。理由がありません」

「あら、理由なんて必要かしら。」

「ええ」

「そうね、じゃあ、私があなたのことを気に入った、というのはどうかしら」

僕は一体どんな顔をしているのだろう。分からない。女が僕の猪口に酒を注いでいる。それすらも、気にならない。

「さあ、お飲みになって。是非」

僕は考えること止めた。ただ、その鈍く光を放つ液体を飲みほした――僕の黒く渦巻く不安と一緒に。

続

作品名

『おいてけ堀』	やない
『声を失った蝉は』	蟻戸諒一
『秘令選挙』	TONA (テーマ作品)
『Lotus』	蟻戸諒一 (テーマ作品)

『おいてけ堀』 やない

家康公が隠居をなされて、世が秀忠様のものになったころでございます。錦糸町にある堀、おいてけ堀と呼ばれていましたそこではたいへん魚が釣れるとの評判がありました。名のある釣り人でも、そうでない人でもひとたび糸を垂らせば喰う。その甲斐あってすぐに桶はいっぱいになる、気分をよくして帰ろうとすると、どこからか声がする。

「おいてけ、おいてけ」

小さな声、怨まれているように聞こえる。怖くなって堀から離れようとする声はだんだん大きくなってまいります。

「おいてけ、おいてけ」

頭に響くその声のせいで、動悸が速くなって目がチカチカしてくる。顔が膨れているような、頭の中で蛇がのた打ち回るような痛みがする。おいてけ、おいてけ。もう限界だと思って力がぬける、手から桶が落ちる、するりと魚は水路を伝ってお堀の方へ帰っていく。とたん頭がすーっと軽くなって、さっきまでの怨み節が嘘みたいになる。

「おいてけ、おいてけってのはなんだったんだ。でももうよそう、ここで釣るのは」

男はひどく疲れた顔でおいてけ堀から逃げていく。このような事が何度もあって、この堀はおいてけ堀と言われて、恐れられるようになりました。

道楽者の勘介は、手遊びではじめた釣りにどっぷりとのめり込んでしまって、ついには魚の卸しをするようになっておりました。ただ性根は道楽のままですから真面目に働こうとはしないで、大物が釣れただの、人が釣れただの、色のつくような処を好んで動く。そうしてたどり着いたのがおいてけ堀の噂でありました。

「お菊、おいてけ堀にいつてくるよ。家のことは任せたからね」

「あまりいい噂は聞かないけども、止めたって無駄でしょうから家で待っております。ただし、夕飯には間に合わせてくださいね」

おうと返事をするやいなや桶と竿をもって勘介は家をでる、辛抱たまらんといった様子。まるで子供のままであるが、お菊が惚れた勘介はそういう男でありました。まっすぐに活発で、よくない噂が絶えないおいてけ堀であっても、勘介ならば心配はいらない、そう思わせる若さがありました。

勘介はおいてけ堀につくと、餌もつけずに糸を垂らしてみました。すると一寸のあいだにもう魚がかかっている、しめたと思ってひきあげると、この魚の大きいなんの。ゆうに一尺はある。次に糸を垂らすとまたすぐに喰われる、こんどは二尺、つぎは三尺。あれよあれよという間に桶はいっぱいになって、もう釣っても仕様がなほになる。

「ここらでよそうか、いや左手が暇になるからな。あと一匹つって帰ろうか」

餌がなくても喰いつくだろうと、糸をぼちゃりと堀に落とす。水面がゆれる、風がふく、すると急に糸が引っばられて勘介は堀に落ちてしまった。なにが起きたかわけもわからぬ勘介だったが、聞こえる声にひらめいた。

「おいてけ、おいてけ」

「でやがったなおいてけ野郎め、冗談じゃねえ。だれがおいてくかってんだ」

糸をたぐって魚を引く。五尺はあろうという大魚だが、勘介はかまわず連れていく。陸にあがり、桶と竿を右手にかついで左手には五尺の魚。

「おいてけ、おいてけ」

一歩はなれるごとに声が大きくなっていく。

「おいてけ、おいてけ」

「まるで念仏だね、こりゃあ。おいてけ堀の噂はほんとうだったんだなあ」

感心はするが、いっこうに手は離さない。おいてけ、おいてけ、頭に鈍痛がはしる。そのうち顔がふくれるような熱

さがある、腹が下るような寒気がはしった。痛みに顔がゆがむ、腹具合が家につくまでもつかどうか。勘介はおもいきり走ってみることにした。

「おいてけ、おいてけ」

すると声がだんだん小さくなっていく。どうやらおいてけ堀から離れすぎたせいで、声が届かなくなったようだった、おいてけ、おいてけ、もうかすむほどの声だ。

「ははあやったやった、もう聞こえねえぞ。おーい菊、菊やあい。おいてけ野郎を退治したぞー」

天にも昇るような晴れやかさで家に入る、するとお菊は顔を真っ青にしていた。

「あなた、どうしたんですか。そんなにやつれて、髪もああ白くなってしまって、肌もこんなに皺くちゃになってしま

って」
泣いたお菊が家を出る。追おうにも足がでない、体に女ひとりをおいかける若さがいないことに気づく。おいてしまった勘介は、おいてけぼりになったそう。

吐き出したい気持ちを抑えながら、歩く。

夕陽に染まる廊下の先では私のクラスメイトが話していて、気づかれる前に、私は保健室に逃れた。

また来たのね、と、驚きとも呆れともつかない感情をあらわにしながら彼女は微笑む。大丈夫、彼女は私の味方だ。私のことなど、知るわけもない。

気持ちが悪いんです。

私は彼女の背中に指を走らせ、書類にペンを走らせる彼女の肩に触れる。彼女の、白衣の袖に手を触れる。私の気持ちは、彼女の大事な部分へと伸び、空気で出来た触手が彼女のそこに触れたように、彼女は私を振り返り、気づかないふりをして、困った笑みを浮かべる。

「その言い訳は今日で十回目」

ここに来るのも十回目。

「まだ言葉、でないのね」

出なくてもいいんです。

私は首を振る。

彼女を後ろのベッドにいざなおう、でも、彼女の心にそれを知られるのが怖い。彼女はいつも拒まない、私の彼女を求める心はすぐにそれと知れる。私が彼女を思う気持ちがいけないと、分かっているがまた誘う。そんな自分に、目を向けたくなくて、私は、彼女の背中に顔をうずめることしかできない。

夕焼けにそまる保健室の磨きかかった床は、どうにも私の心を揺さぶる。休日に心を落ち着かせる雨の音とか、無意識に母体を思い描かせるテレビの砂嵐とか。それに、彼女の声は似ていた。

「分かったわ、休みましょう」

何時になったら、彼女も、自分の嘘を認めるのだろうか。私は、悲しい。悲しいけれど、大人であるはずの彼女が変われないのに、私が変われるものだろうか。

私をベッドに案内すると、彼女は私をゆっくりと布団に寝かせ、部活が終わる頃には帰りなさい、と告げる。いつもどおりだ。私は、去ろうとする彼女の白衣の袖を、弱く、内心を吐露しないように、うそっぱちの力でつかむ。いつもどおりだ。だから、この後の展開もいつもどおり。彼女は、困ったような、本意ではないような苦笑のあとで、義務的に、責任的に、私とセックスをする。

「ねえ、こんなことは、もう」

彼女の喘ぎ声は、果たしてどこから出ているのだろうか。肺の奥に、きっと彼女でしか開けない扉があり、その扉が開いてしまうと、もう一人の彼女が肺を出て、彼女の脳に入ってくるのだろうか。私は、喘げない。喉の奥にも肺の奥にも扉はあるが、その開け方が分からない。

いけないのよ……里美さん……いけないの……

喘ぎ、喘ぎ、喘ぎ……。

いけないのよ、私、いけないの……

彼女は苦しげに吐息を漏らし、甘い声でさえずり、私の胸の奥は、このとき、からっぽになる。彼女が私を求めるはずなど無いのだと、悲しくなって、でも、彼女の奥に待ち受ける孤独の神秘に近づきたい一身で、私は、彼女を求める。

あっ、と、憂いを帯びた悲鳴が上がり、蝉の鳴き声も、シーツに皺の寄る音も、ブラスバンドの高音も、なにもかもが、その一瞬、消え去る。

荒い呼吸を胸に抑えながら、私は彼女の激しく上下する胸の上で、その温もりに顔をうずめる。私よりも、滑らかで、百合のように白いその双丘。今にも砕けてしまいそうな細い首は、苦しいほどに息を送り出し、生命の絶対を物語る。

「私が悪かったのよね。はじめにこんなことを教えたのは、私だもの……」

夕陽を浴びた彼女の顔は、返り血を浴びたようで、ぞっとするほどに美しくて……でも、その距離の絶対性は普遍であり、私は泣きたくなる。

願わくは、その最後には甘き失恋を。

初恋の初夏、私は、吐き出したい気持ちを抑えながら、彼女との情事を終え、帰宅した。

聡明な彼女のことだから気づいていたとは思いますが、彼女のカンニングを告げ口したのは私であった。教室の中での私の立ち位置は、食物連鎖で言う最下層。口を持たず、声を持たず、意志を持たず、有機を持たず。だから、教師も私には訊き易かった。安西が期末テストでカンニングしたのだろう、と。

「安西はカンニングをしました、でも、先生はそのことを責めようとは思わない」

教室の静けさは、いつも私の耳には遠い出来事のように聴こえる。それよりも私の興味があるのは、なぜ、どうして、私がこの教室に存在を許されているのであろうか、という一点で、だから、突然私の名前が呼ばれたときは、どうにも、居心地が悪かった。

「そうだよな、里美。安西は、お前の友達だもんね」

友達と、彼は連呼した。彼はその言葉が大好きなのだ。

友達といえば、遊園地にだってただで入れると勘違いしているに違いなかった。

「友達だったら、チクったりしなくね」

男子とも女子ともつかない誰かが言う。それは、その通りだ。彼らの辞書に書かれたままの言葉を用いるのなら、友達の延長線上には「仲間」があり、仲間の延長線上には「敵ではない」という定理が伺える。おもしろい。

放課後、分かっていたことだが、安西琴美は私を女子トイレに呼んだりしなかった。彼女を聡明、と呼ぶ理由はそのあたりに漂っている。狂ったように「友達」を連呼する教師よりも、「友達」の定義が曖昧なクラスメイトよりも、私は彼女の辞書を覗いてみたいと、常々思う。

「里美さん、一緒に帰ろう」

哀れみの視線が、針のように私の背中に向けられた。教室のあちこちから――もしくは、保健室以外の学校全体から向けられたようにも思えた。

彼女の家は山の上にある。私の家はその麓にある。

彼女は、都会の高校に推薦をもらうのだと、私に告げた。楽しそうだった、と思う。彼女の瞳は夕陽を浴びて、涙をこぼしそうなくらいに潤った輝きを私に反射し、私は、素直に彼女を美しいと思った。

思い出したように、その通り、思い出したというように、彼女はふと言葉をとぎって、話題をそちらに向けた。

「どうして私のこと告げ口したの？」

いいわけはしたくない、と思った。

「ごめん、口がきけないんだよね」

でも、と言って、彼女は携帯電話を取り出した。最近テレビでよく見る、タッチ機能のついた最新機種だ。クラスの誰も持っていない、彼女だけのものだった。

「じゃあ、ほら、携帯電話のアドレスを交換しようよ」

数回、私の唇は開閉を繰り返し、喉の奥の扉が開くことは無かった。

私は携帯電話を鞆から取り出して、彼女の携帯電話と背中を合わせる。赤外線通信の使い方が分からなくて

準備に手間取った。彼女は「私がやろうかー？」と言っては、くすくすと笑い、その声が、私の頬をくすぐったく撫でるのであった。

『ごめんなさい、先生に聞かれたから』

メール編集画面にそう打ち込んで、彼女に送信する。

彼女は、まばらに日の落ちる街路樹の下でスカートを翻し、紅い空気をかき混ぜるように、くるくると踊る。その姿が、私は初めて見るもので、戸惑い、そして、私の辞書の彼女の項目が、上書きされるのではなく、追加書き込みされた。

『安西琴美 あんざい - ことみ 聡明。愉快』

けれど、彼女の息をする層は、私と同じ最下層だ。

「里美さ、学校のまんまで生きることないよ」

琴美の水気を帯びたぷっくりとした唇の動きが、子守唄でも歌うみたいに、私をぼうっとさせる。

ふら、と琴美は車道に足を踏み出し、車を寸でのところで避け、反対側の歩道に足を乗せた。どこか遠くから罵声が響いてきたが、アブラゼミの笑い声にかき消された。

「みんな、勘違いしているよね。そう思わない？」

そう言い残して、琴美は、路地の向こうへと消えていった。野良猫が帰るように、彼女もまた、夕陽の向こうへと、消えていった。

私は家がそちらの方向ではなかったので、別の道を行った。

吐き気がするんです。

保健室に、誰の声も響かない、無機質な静寂が漂う。それは、消毒液の匂いとか、シーツに染み付いた汗のすっぱい香りとか、全部を、私の前から吸い取って、消えた。

「声が出るようになるまで、ここには来ないでね」

その言葉も、消えてくれればいい、と願ったが、どこにも消えないまま、私の胸の中に味の抜けたガムのように留まった。

帰り道、クラスメイトの柏崎が、安西に呼び止められていた。覗き見る気もなかったのでそのまま通り過ぎた。翌朝教室に入り、私はその答えを知った。

黒板には柏崎と安西を囁し立てるような文字がびっしりと書き込まれていた。あれのどこかに保健室の彼女の名前があればいいのに、と思ったが、どこにも見つかるはずも無かった。

一週間が経ち、また、私は安西琴美と柏崎が暗い顔を付き合わせているのを見た。今度も、覗き見る気はしなかったのだが、彼女は私に気づき、蕾が開くように華やいだ表情を見せ、私のもとに駆け寄ると、私の手を引っ張って歩き出した。そちらは私の家がある方向とは真反対だったが、携帯電話を家に忘れてきてしまった私にはそのことを伝える術も無く、ただ、変わらぬテンポで地面を踏む彼女の背中を見ながら、心地よい浮遊感に浸った。

「あいつ、うざいんだよね」

彼女は言う。その口調は今までに見たことの無い彼女のもので、また、私の中に生まれた戸惑いと喜びが、辞書を書き換えさせた。

「役割が分かってないよ」

役割。それが、今のところ彼女の辞書で最も書き込まれている項目なのだと、一瞬で悟った。言うまでも無く、そのことも辞書に追加する。

「私たちには、それぞれの役割があるって思うの」

学校では憎まれ役の才女、家では妹のよき相談相手、一人きりのときは舞台裏。そんな風に、決められた人間関係の中で、決められた役をこなすのが私たちなのだと、彼女は言う。頷く。誰にもこの気持ちは伝わらない

だろうけれど、とりあえず頷く。

「あなただって、家では家の役割があるでしょう？」

役割。

押し付けられた言葉にしては、私の辞書の中では大きな存在となった。

私は彼女と途中の公園で別れ、来た道に戻った。

「声は出るようになったの」

問い詰めるような彼女に、私は、どこから鍵の閉まるような音を聞いたが、それが自分の中から聞こえた音なのか、保健室のどこから聞こえた音なのか、分からなかった。

首を振る。

いかにも、という風に、彼女は困った顔をする。

「ねえ、分かってよ。今の貴方にとって、私は邪魔な存在でしかないのよ。性的な悪戯を施して、それでいて貴方の欲求にはこたえない、勝手な女なの」

女。

彼女の辞書には載っていない言葉だ。

「あなたの声が聞きたいの」

嘘。

彼女の辞書には載っていない。

「気持ち良いことだから、体をもてあます貴方の年代は特にしたくなるのは分かるのよ。でもね、その……」

自己保身と自己嫌悪の邂逅、衝突、振動、残響。

そして残った、背徳的な欲望。

それこそ、彼女の辞書の漂わせる匂いだった。

「ねえ、だめ……」

私は、彼女をシーツの上に押さえつける。そこで、全ての選択権は失われる。あとは、本能に任せる。考えなくていい。どこにも気持ちを置く場所に困らなくていい。

私は、この瞬間、役割を、最下層の人間だということも忘れ、彼女とのぬくもりを共有し、吐き気を、消し去ることができる。

「あっ」

私の中の、もう一人の誰かが、果て、声を上げた。それは、私ではない。私の声ではない。でも、この声が私に成り代わろうとしていることには気づいていた。

柏崎が休学処分になったのはその次の週の月曜日で、一人で登校してきた安西琴美の頭には包帯が巻かれ、その日一日中、教室の中からは呟きの一つも漏れなかった。

「突然彼が迫ってきたの」

夕陽に染まる髪をかきあげて、彼女は呟いた。

「私は抵抗したわ。だって、私の役をこれ以上重くされたくなかったんですもの」

『柏崎とはセックスをしたの？』

首を振る彼女。

「私、ああいう馬鹿な男の子に興味ないの。柏崎といたのは、ただ、何か変わるかもって思ったから」

『変わりたいの？』

彼女は、歩道に落ちた影とおなじくらい長い間を置いて、首を振った。

「変わりたいくはないの。ただ、他の人の役割を覗いてみたくなっただけ」

憂いを帯びた空気が、街路樹の葉っぱの隙間を縫うように広がる。私は、携帯電話をしまい、彼女のあとを黙ってついていった。家の方向と真逆に進み始めても、私は、彼女の家までついていった。

「入る？」

頷いて応える。

彼女は一戸建ての家に住んでいた。質素な家だ。それだけで、なんとなく、彼女の役割の全てが分かった気がした。辞書を更新する必要はなかった。

琴美の自室に入ると、当然の様に、私たちはベッドに腰掛けた。

「里美の唇って、柔らかそう」

そんなことはない。琴美の唇のほうが柔らかい。今だって、私の唇は彼女の唇のふっくらとした赤みの中に沈み込んでいくだけで、まるで抵抗することが出来ない。

「嫌じゃないの？ 私たち女の子同士だよ」

首を振って応える。

「でも、こういう時って、どうするんだろう」

私は、スカートに包まれた彼女の太ももに手をかけた。触てみると、肉つきがよく、はじけるような弾力があつた。私はそこに体重を預け、彼女の顔に自分の顔を近づける。そして、そのまま、ベッドの上に押し倒す。

琴美の肌は、新雪のように、汚れをしらない白さだった。浮き出たあばら骨の細い輪郭に爪を滑らせると、彼女は、すっと息を吐くように喘ぎ、驚き戸惑うように、自分の口を手で塞いだ。私は彼女の下着を優しく剥ぎ取ると、肌に指を這わせ、夕陽を受けて破裂しそうなほどに突き立った彼女の美しい小丘を眺め、吐き気を飲み込みかけた。役割を見出そうとする少女の顔は純真の萌芽で桃色に色づき、さしこむ夕陽にも負けず、赤かった。私は、そっと指をすべりこませる。もう少しだった。もう少しで、全て、選択肢の及ばない領域に私の手が触れる。その時、抑え切れない吐き気が、私を襲った。私の指が、神経が、血管が、皮膚が、全てが彼女の奥を知ろうとすることを拒んでいた。私は、気づくと、乱れた衣服もそのままに、夕暮れの街へと駆け出していた。

彼女は、いつもどおり、そこにいた。

気持ちが悪いんです。

声は出ない。

つん、と鼻の付け根を刺激する消毒液の匂いが、私を、無性に、泣かせた。

「いいことを教えてあげる」

憐憫の情を瞳の奥に宿し、彼女は、私の背中に手を這わせた。力強く、私の中でばらばらに吹き飛びかけたものをつなぎとめるかのように、力強く。私も、彼女を抱きしめたかった。お互いの神秘を場違いに求め合うのではないその行為が、私には、この世の全ての答えに相当するように思われた。

私たちは、夕陽の中に佇む。

遠くで、ひぐらしの鳴き声が聞こえ、私はようやく、この夏の行く先が見えた気がした。

旅行というわけではないが、自然に重い腰をあげる日がある。日というよりは期間であるが。年に一度の風物詩。乾いた夏真っ只中にある国民的恒例行事、お盆。またというか、やっとというか。季節はゆったりと一巡し、全国的にお盆が訪れた。

恥ずかしながら、未だにお盆と呼ばれる期間を正確に把握出来ていない。いい大人なのだから、冠婚葬祭に関わる一般常識は人並みに備えておかねば、いざのその時に困る。解ってはいるけれど、先延ばしにする理由を探しては放置して今に至る。結局、大して必要にかられなかったのだ。

迎え火から立ち昇る白煙が天を目指している。

ゆらゆらと風に揺られる一筋の糸は、懐かしいあの人を正しくこちらに導いてくれるのか。故人との懐かしい思い出を胸に秘め、遺族は門戸を開いて死者を招き入れる。

なんやかんやでお盆は動く時期である。色々なものが。

この時期、墓に祭られた故人の靈魂は子孫の成長を見るために降霊するという。そんなご先祖さまに顔を見せるべく、普段は故郷を離れている人々はお盆休みの名目で帰省し墓に参る。

合掌。神に祈る願い事ではなく現状報告。おかげ様で元気に生きています、安らかにお眠りください。

墓前で静かに語りかける子孫の姿を、ご先祖さまはどのような表情で見届けているのだろう。

そんな感じでお盆は動く時期である。色々なものが。

物理的にも、精神的にも、そして水面下でも。

一 起点

不思議な感覚である。少なくともユージには生涯無縁だと思っていたのだから。

確信に限りなく近い一種の決め付けで、遠巻きに眺める以外の姿を一度として想像した事が無いのだから。

「我々の党は、皆様の願いを第一に考えております。最大限の誠意、最大限の努力。この二つを指針として我々は活動しております。不満のある方、果たしたい願いのある方、夢を託したい方、皆様それぞれで抱えている思いは違うでしょう。その思い、どうか我々に預けては頂けないでしょうか」

知人が大声を張り上げて演説している。国政選挙に出馬する候補者のように、聞くに心地よい啓発の言葉を並べている。

演説者の名はゴロー。普段の彼からはおおよそ想像のつかない真摯な姿勢に、特定の思想を持たぬユージは気付かぬ間に引き込まれてゆく。

聴衆も同じ感覚だろう。眼下より立ち上る熱気は見るからに好意的で、所々で恍惚とした表情も散見される。

「我々の党には多くの候補者がいます。党に属する候補者が多いと、皆様の願い一つ一つが党の方針に反映されにくい弊害がありましょう。確かそうです。全面的にご安心くださいと、声を大にして言えない事は心苦しいですが、一つ、絶対の自負をしております」

独壇場の演説を続けるゴローに肩を捕まれた瞬間、皆の視線が集中する。

「ご存知の方もおられるでしょうが、改めて紹介致します。彼は我々の党の候補者で、名をユージと言います。今日まで共に党をまとめ上げてきた同志であり、私の親友です。お互いに呼び捨てで名を交わす仲で、思いを共有して今回の秘令選挙に臨んでおります」

笑顔はぎこちない作り笑いで、気の利いた台詞は見つからず、軽い会釈しか出来ないユージに

対して聴衆は優しくった。「期待しているぞー」とか「落ち着いてー」といった激励の言葉と、誰からともなく始まった拍手はすぐさま隣に伝染し、会場を震わす大波となってゆく。

ユージは元より、ゴローとその他の候補者もしばし無言。当たり障りのない笑顔で手を振り続ける。

「私は、我々は、他のどの党より皆様と会話を重ねて参りました。交流を重ねて参りました。決して充分ではないかもしれませんが、出来る限りお互いの理解を深める機会を設けて参りました。これだけは先ほども申しましたように、絶対の自負をしております」

聴衆の反応はしだいに言語体系の縛りを脱ぎ捨て、ごく簡素な単語に変化してゆく。

言ってみれば原始的な咆哮。拍手で音頭をとる人もいれば腕を振り上げる者もいる。心地良いほどにノリノリである。

会場の空気はひとつの意志によって統一された。空気を読むとは抽象的な比喻で、物理現実では不可能な行為なのだが、空気に綴られた文字が誇張ではなく目に浮かぶ。

選挙演説に参加する事が初体験なら、この感覚も初体験である。

「皆様。我々にやらせてください。一つでも多くの願いを叶えてみせます。党の二大指針、最大限の誠意と最大限の努力、この二つの原則の下、我々は粉骨砕身に、そして不惜身命の覚悟で皆様の願いを果たします!!」

瞬間、黄色い歓声と野太い雄叫び。天井知らずの熱気に身が震える。

熱狂は宗教の一形態である。世に聞こえる高名な哲学者の格言、ではなく自作の感想文。

生来、他が騒ぐと反比例して冷静になってしまう性格である。どうしても場違いな感が拭えない冷めた心で一言つぶやく。帰りたいと。

§

沈黙。静寂が心を支配するとき、頭に回想が駆け巡る。気分に関係なく襲ってくる感慨は、自分の位置を正確に捕捉しては嫌味を残して消えてゆく。

ついこの間の出来事だというのに、遠い昔話のように現実味が沸かない。自分の記憶の筈なのに他人の事のように断片化された映像は、所有者の証明を感情に求めている。

利き手に握られたペンが記号を描く。五線記譜法に基づいて音符を書き込んでいると、柄でもなく大声で叫びたい衝動に駆られる。言葉でなくて奇声で。

初体験の連続である。あの日以来、ゴローに出会ったその日以来、ユージの未来予想図が崩れ去った日以来、驚くほどに初体験の連続である。

決して悪い奴でもなく、むしろユージ側からも親友と言ってもいい位に気を許したゴローだが、持ち前の強引さと行動力には苦笑してしまう。

ある意味で非凡な魅力をもつ人物。いわゆるカリスマと呼ばれる部類のゴローは、ユージを候補者に引き込んだ事を皮切りに、本格的に選挙活動を開始した。年に一度、毎年必ず行われる秘令選挙に参加する為に。

無防備な犠牲者が増えるのは、引き込まれる当人には悪いと思うが面白かった。同時に安心を覚えた。似た境遇の仲間が増える事が、イコールでユージの心情を正しく理解してくれる同志が増える事であり、妙な連帯感が生まれた。小市民的な感情だが、偽りない本音である。

もっとも普段は軽薄な言動を飄々と繰り返すゴローだが、中身は紛れもなく策士である。

ゴロー以外の候補者たちは同じ思いを共有する同志であり、党の方針とは隔絶した独自の連帯感で結ばれている。それら全てが計算上の規定事項で、実は遠望がきいた仲間集めではと邪推した事もある。

重ねると逆に嘘っぽく聞こえるが、ゴローは決して悪い奴ではない。紛れもなく親友である。ただ節々で分かり易く黒いのだ。

さて、と。小さく溜息を吐きつつ、中断した作業に気を向ける。

ただ書き続けるだけ。魂に刻み込んだ記憶を頼りに、意味の解らない記号の羅列を楽譜に記入し続ける。無心にひたすらに終わりまで。

ト音記号、シャープ、八分音符、エトセトラ。

決して単純作業ではないし肉体労働でもないが、疲れるものは疲れる。

ユージの中の音楽知識は付け焼き刃の浅いもので、ほとんど無いに等しい。作曲など到底不可能。当然ながら、楽譜を書く姿を夢の中ですら一度も想像したことがない。

そのユージが楽譜を書いている。何をしているかが解らない。何を書いているのかが解らない。であるのに体は、手は勝手に理解不能な記号を描き続けている。奇妙で不気味で不可思議な体験は、予定ではあと少しだけ続く。覚えている限りでは。

発端はゴローである。もはや当然の事だが、彼が原因である。

依頼主は高名な作曲家にして演奏家、狩生弦聖（かりゅうげんせい）。主に弦楽器を中心に作曲する有名人で、彼の作品は世間的に知名度が高く、専門家の中でも非常に評価が高い、らしい。他から聞いた話と調べた情報からは、そういった印象を覚えた。

弦聖というのは名前ではなく通称であり、卓越した演奏技術、弦の特性を知り尽くした作品の数々を讃えた最上級の賛辞である。

狩生といえば弦聖、弦聖といえば狩生。音楽界では周知の方程式らしい。常識とも言う。

ユージは業界に明るくないので詳しくは知らないのだが、それほどに世に知れ渡った偉人が今回の依頼主、狩生弦聖その人である。

依頼の内容は言葉で表せば簡単だ。ただ記して欲しい、たったそれだけなのだから。

問題があるとすればユージの知識の無さだけだ。もっと根源的な原因まで遡れば、くじ運の悪さが災いしたただけだ。要はついていなかった。この一言に尽きる。

世に聞こえた作家・狩生弦聖だが、知名度以外で驚いた事がある。名前から察するに無意識に男性だろうと勝手に思い込んでいたのだが、実際は女性。しかもとびきりの美人。彼女に対し、天は二物を与えたようだ。隠徳陽報。前世では余程の徳を積んだのだろう。

その彼女、狩生弦聖に目をつけられたのが不運の始まり。

ゴローはというと「お前なら出来る」と一言だけ労いの言葉を残し、そのまま去っていった。人の気も知らずに何たる無茶ぶり。もう笑うしかない。

まったくもって災難である。依頼を請け負ったからには途中で放り出せない。なぜならユージが所属する党の二大指針は、最大限の誠意と最大限の努力なのだから。

依頼実行までの準備期間、狩生弦聖と過ごす時間は苛烈を極めた。一言でいうなら地獄である。

誰もが目を奪われる美貌とは裏腹に、狩生弦聖は辛辣な毒舌家だった。覚えの悪いユージを見るや「この愚頭」「の一たりん」など数々の罵声を浴びせてくる。そこには一切の容赦が感じられない。徹頭徹尾に高圧的なのだ。

当初は理不尽な態度に怒り、声を荒げて言い返したもののだが、反論するのはいつとなく止めた。事ある度にネチネチいびられていると、いつしか解脱の境地を獲得したからだ。いや違う、諦観の心を授かったのだ。

ひとつ思った事がある。この女性は、狩生弦聖は可哀想な人なのでは、と。

誰もが羨む美貌と才能。二つの天賦に恵まれた狩生弦聖は間違いなく傑人だが、当人は密かに疑念を抱いていたのではなからうか。

たとえば狩生弦聖への周囲の評価は、大衆受けする抜群の美貌に目が眩んだ媚であり、演奏力や作曲力は無視されてはいないか。そう疑えば疑うほど疑心暗鬼に陥り、自分で自分を縛り詰め、敵を作ってるのではないかと。

あくまでも推測である。何の根拠も無い。

狩生弦聖に哀れみの目を向ける事で止め処ない罵声に受け流す、という防衛本能が無意識で働き、勝手に誇大妄想を膨らませたとも言える。

なんにせよ図らずも手に入れた泰然たる心は、ユージに幾ばくかの余裕を与えた。狩生弦聖の暴言にここまで付き合っていたのだから、この先何があっても誰と会っても怖くない。

そうやってユージは、無理難題を押し付けてくる狩生弦聖に振り回される日々を過ごした。心の片隅でゴローの深謀遠慮を疑いつつ、依頼の実行日が早く来ないものと切望しながら。

そしてやってきた。待ち望んだ日がやってきた。狩生弦聖のしごきから開放される日がやってきた。

思い起こせば、時が経つのは早いものだ。狩生弦聖に出会った日が、つい最近であるかのよう錯覚してしまう。

「狩生さん」

「なによ。無脳。むかつく」

日常会話の罵詈雑言。特定の分野に集中した語彙は一体どこから溢れ出てくるのだろうと、斜に構えた視点で過ごした日々も懐かしい。

一時はぎりぎりまで精神を痛めつけられたというのに、終わりが訪れた途端、いい思い出と受け入れている事実苦笑する。

「あんたがの一たりんだから、もうお盆が来ちゃったじゃない。あ一つかえない。これだから愚頭は嫌いなものよ！」

盛大な溜息を吐く。何に対してとはあえて問うまい。

ふいに姿勢を正し、狩生弦聖に向き直る。しばし無言で直立不動。

「教えて頂いたことは絶対に無駄にしません。狩生さんの名を汚さぬよう、最大限の誠意と最大限の努力を約束します」

深々とお辞儀。狩生弦聖は呆気にとられて言葉を失う。「なにをやってるの」と。

出会ったばかりの頃のユージでは、決して出来なかっただろう。美貌と才能を鼻にかけた嫌な奴、というのが印象深いのだ。年長者を尊び敬えとはいえど、心が伴わず杓子定規に頭を下げるなど願ひ下げだ。

だけど今は違う。狩生弦聖と共に長い時間を過ごした。お互いに理解し合う事は出来なかったけれど、一方的に理解する事は出来た。

出来の悪いユージを見捨てずに最後まで付き合ってくれたこの人は、不器用だけど真面目なのだ。なにより音楽に対して誰よりもひたむきなのだ。

「狩生さん。現世に残ったあなたの作品、その続きは自分が完璧に書き上げてみせます。あなたの名前、狩生弦聖の名前で、何が何でも発表してみせます。だから、」

頭をあげて目を合わせる。狩生弦聖の目を見つめる。

改めて見ると、本当に綺麗な女性である。神秘的なまでに整った相貌、妖艶な肢体、何もかも完璧。口を閉じていれば、女神そのものの顕現と言われても疑わないだろう。

けれど狩生弦聖は人間だ。いや人間だった。数年前に他界した、人間だった人なのだ。

そして自分も、瀬川ユージもついこの間まで、人間だった人なのだ。

「だから、もう——落ち着いてください。あなたは、音楽がまったく解らない僕から見ても、凄まじいまでの才能と圧倒的なまでの情熱を持った音楽家なんです」

狩生弦聖が無言で目を合わせてくる。瞬きもせず、ただじっと見つめてくる。

開けば毒を吐く口も今はつぐみ、次の言葉を待ち望んでいる。ユージにはそう見える。

「音楽の知識を持っていない自分の無能が、浅学非才が情けないです。あなたが教えてくれた楽譜をみても、頭に音楽が流れないんです。だけど感じます。あまりの才能に眩暈がします。素直に嫉妬します」

ゴローの演説を思い出す。

演説を聞いている最中は、よくもまあ次から次へとひっきりなしに、噛まずに淀みなく語り続けられるものだと感心していた。まず真似できない。そう思っていた。

けれど違った。飾りも打算も隠し事もない、心からの本音を語る今、伝えるべき言葉が尽きる気がしない。愛の告白をした時ですら、ここまで開かれた心で台詞を紡げなかった。

初体験だ。すごく心地いい。

「そろそろ自覚しても良いはずですよ。あなたは凄い。お前に何が解るのかと思うでしょう。でも一庶民の意見を言わせてもらおうと、死してなお作品を完成させようという情熱も責任感も、普通の人は持ってません。その時点ですでにあなたは凄い」

息を付く間もなく、持てる語彙の限りを尽くして伝える。

口を開くたびに怖くなる。どうか伝わって欲しいという、一方的な願いが強くなるにつれ、表現しがたい不気味な不安が沸いてくる。

「そして……」

「あー、もういい。もういいわよ。わかったから」

狩生弦聖が笑っている。笑顔ではなく眉をひそめた苦笑ではあるが、少なくとも笑っている。

右手で髪を触りながら小さく溜め息を吐き、狩生弦聖はそのまま口を開く。

「絶対よ。嘘ついたら殺すわよ。いいわね！」

言うなり狩生弦聖は後ろへ振り返り、そのまま歩き去る。優雅にゆったりと。

絵になる後ろ姿。言葉ではなく態度で語り、言語ではなく心で語る。

「……じゃあね、の一たりん」

一言別れの言葉を告げ、狩生弦聖の姿は消えた。

死後も世に名を知らしめる音楽家・狩生弦聖。その背中には神々しい光に包まれながらも、最後の最後までか弱い一人の女性のそれであった。

出来上がった譜面を手に取り、目を皿にして間違い探しに没頭する。

約束したのだ。絶対に完璧にやり遂げることを。失敗は取り返せない。親愛なる巨匠の名を汚してしまうのは耐えられない。

最大限の誠意、最大限の努力。基本指針にして行動の原則なのだが、今にして思えば生温いと感じる。最大限を絶対に、誠意と努力は当たり前。完全無欠の結果を残してこそ意味がある。頼まれた意味がある。

「よし、よし、よし。よし、完璧。時間が掛かりましたが、やっと出来ました。お待たせしてすみません」

誰に言うでもなく小さく呟く。

一枚一枚丁寧に角型封筒につめ、何処を見るでもなく宙空に視線を泳がす。当然ながら誰もいない。背に突き刺さる嗜虐の台詞はもう聞こえない。

うだる熱気で陽炎が踊る。滴る汗を拭いながらも、止まらず休まず歩を進める。

蓋世の音楽家、狩生弦聖が現世に残した最後の心残り。俗に未完成交響曲。名前も知らない音楽家の筆跡で未完成は完成へと昇華する。作品の質はもとより至上。仕上がるまでの経緯を加味して更に至上。遺作は今日、歴史的な名作に生まれ変わるのだ。

許可を取らずに憑依した非礼は、狩生弦聖の名の下に許して欲しい。足りなければいくらでも頭を下げる。だから許して欲しい。

目的地が見えてきた。最初の任務がもうすぐ終わる。自然と頬が緩む。同時に否応なく胸が高鳴る。

合縁奇縁による死後の出会い。色んな意味で衝撃的だったが、終わってみれば名残惜しい。

門前で立ち往生する影法師。家主は呼び鈴に誘われて戸を開き、訪問者といくつか言葉を交わした後に母家へ消えてゆく。

ぼんやりと放心しながら、ふと想像してみる。狩生弦聖は褒めてくれるだろうか、不遜な態度で馬鹿にするだろうか、それともお礼を述べるだろうか。

きっとどれも違う。狩生弦聖は何も言わず、ユージの問いかけを無視して去ってゆくだろう。

ならばユージが残す台詞は決まっている。

「じゃあな、狩生弦聖」

女性でありながら男性よりよっぽど格好いい狩生弦聖。彼女が残した最後の台詞を勝手に拝借し、我ながら身分不相応な締め台詞を吐く。

一つ目の指令が終わった。狩生弦聖との思い出は終幕を迎え、音もなく静かに幕を下ろした。

夏の終わりが見え隠れするが、お盆はまだ始まったばかり。

迎え火を手繰り寄せて、顔なじみの靈魂は現世に次々と舞い降りる。今年もまた、一度きりの暑い夏が始まるのだ。

お盆は動く時期だ。色々なものが。

さあ歌おう。開始と共に現世に届けられた空前絶後の最高傑作と共に。

終（一 起点）

二 承引

情報化社会の文明の利器、インターネットは非常に便利だ。世界中に散らばる膨大な情報を簡単に手に入れられるのだから。適切な単語を検索するだけで、目的の情報を得られるのだから。

時間は有限だ。効率的に任務を遂行するには、まずは情報。適度な下調べを経て事に当るのが上策である。

託された願いを一通りに吟味して考察を重ねる。さしあたり、インターネットの検索機能に委ねられる任務は二つ。まずは小田氏と桐沢氏に託された任務を消化して、そのまま勢いに乗って仕事を進めよう。

小田氏の指令は簡単だ。気になる映画の続きが知りたいから、代理で観てきて映画の内容を教えてほしいと言う。ちょちょいのちょいと検索を終え、任務は早くも終了した。

続いて桐沢氏の指令。曰く、息子の死を調べてほしいとの事。一見して漠然とした願い事である。地球上に何十億と生きている人間の中で、一人の死を調べ上げるのは困難に思える。

最初は無理だと断ったのだが懸命の懇願に根負けし、結局は請け負ってしまった。仲間に事情を話して相談したところ、ゴローは何も言わず、ココノエは応援をしてくれた。棒読みだったけれど。

情報はあっさりと見つかった。

事前に桐沢氏から聞かされていたが、桐沢氏の息子はそこそこ名の売れた有名人らしい。身内最良の惚気だろうと高を括っていたが、結果的には真実だった。ユージは今日まで知らなかったが、桐沢氏の言葉は本当だった。

「桐沢カズヤ。株式会社かごにわ食環の元副社長。同僚に刺殺され死亡、か」

刺殺とは穏やかじゃない。刺されるなんてよほどの事だ。会社で何をしていたのかは分からないが、相当に恨まれていたのだろう。

はてさてどうしたものか。この情報を持ち帰って包み欠かさず桐沢氏に伝えるのか。

懸案事項は調査を達成した瞬間に変容し、伝達方法の悩みへと様変わりした。安請け合いは考え物だと、先見の明を持たない自分につくづく辟易する。

下手の考え休むに似たり。こちらでゴローに会う機会があったのなら改めて相談してみよう。利用されてばかりなのだ。たまには此方から利用しないと割に合わない。

一先ずは小休止。深く息を吐いて思考を切り替える。

託された任務はまだ残っている。一に囚われて他を失うのは下策だ。

お盆に合わせて現世に降霊した靈魂たちの持つ時間は更に短い。時間は有限なのだ。

次の願い事を果たす為に、仮初めの肉体との同期を解き放つ。

そのまま壁を通り抜けて外に飛び出し、魂に刻まれた導きに従って次なる目的地へと飛んでゆく。

§

生い茂る雑草の中、苔の生えた墓石が見つかった。

達筆な文体で家名が掘り込まれた花崗岩にはつるが巻きつき、所々に虫の死骸が散乱している。

。緑系統の色で塗り固められた視界。周りは背丈ほどに成長した草ばかり。不自然に折れた形跡が無い事実と加味して推察するに、この場所はもう長い間、人の世から隔絶された空間なのだろう。

実際、近場の民家に人の気配はなく、村道と思しき通りでも人とはすれ違わなかった。

最後の一人が去った日から原点回帰が加速する。自然に戻る。自動的に元に戻り続ける。

上杉氏から託された任務は簡素で、先祖の墓参りをして欲しい、というもの。そして可能であれば墓の掃除をと承っている。

お盆のこの季節、実家の墓に訪れる人々の目的は同じだ。

普段は構いもしないけれど、年に一度だけは、この日だけは墓前で死者を弔いたい。裏も表もなく、日本人として生まれたのなら誰もが共感する素朴な願いを、上杉氏は代理人を立てて願ったのである。

本来は上杉氏自身でやらなければならないのだが、上杉氏の初盆はもう過ぎた。与えられた唯一の権利は使いきった為に、もう此処へは来られないのだ。

秘令選挙。それは現世への帰還の権利を得る為の選挙。候補者の最低限の条件は、初盆。

故人と現世との間にある結びつきが強くなければ、霊魂は現世に留まれない。

単体では極めて脆弱な霊魂は、収める血肉が無ければ崩れ去る。霊魂としての形骸すらを含め、一切の記憶と共に霧散してしまう。

死後四十九日を過ぎた後に迎える初盆は、日本人ならお馴染みの民俗行事だが、生ける人と死せる人の願いが強い分、立派な降霊儀式としての性質を持ち合わせている。

迎え火によって現世に降り立ち、送り火によって文字通り送り出される。初盆に行われる遺族との顔合わせは、葬式とは一線を画した最期の別れの儀式なのだ。

もっとも秘令選挙で権利を手に入れた候補者の全てが、現世に戻って来られるわけではない。

初盆諸々の儀式はあくまで形式である。根は、候補者との面会を求め、別れを告げたいという願いの有無と強さにある。

瀬川ユージは帰還を果たせた。

上杉氏も一度は戻って来られたらしい。ただしどうやっても二度目はなかったらしい。

例えようもない無力感に襲われる。

古びた墓標を目の前にして、死したユージの限界を心ならずも悟ってしまった。

人の純粋な願いを託され、いざ任務実行の場に居合わせたものの何もできない。結実することのない指令を安請け合いし、悪戯に期待を持たせてしまった事がなにより歯がゆい。

ここには誰もいない。人が居ない為に、体を拝借してお墓の掃除も出来ない。それ以前に、墓に葬られたであろう霊魂の気配もない。

このお墓の存在を知っている者は、おそらくユージを含めると、あとは依頼主の上杉氏のみのだろう。

最後の砦であるユージは、花の一つも備えることが出来ない。あまりにも、あまりにも何もなさすぎる。

何もできないユージ。いつの間にか死んでいて、いつの間にか肉体を失っていた。ゴローに誘われるままに秘令選挙に参加して、そして死者の願いを背負って現世に降霊した。

「自分は無力だ」

時間を忘れて瞑目する。継ぎ接ぎだらけの拙い言葉を並べ、上杉氏の思いを墓石に刻み込む。

どれくらいそうしていただろう。現世に留まれる時間が限られている中、一瞬にも感じる麻痺した感覚に促され、ゆっくりと目を開ける。風が草木を揺らしていた。

辺りの光景を見回す。日が燦々と照りつけている。まだ夏は続いているようだ。

最後に深々と一礼して墓前を去る。

確信である。もう此処には戻って来られない。もう、二度と。

次の任務予定地へ向けて移動中、とある後ろ姿に目が止まった。

よく見たら知人だったけれど、しばらくは声を掛けられなかった。

忙しくなく人の行き交う雑踏の中、ぽっかりと切り取られた不可侵領域の中心にココノエは佇んでいる。

花の刺繍が印象的な和服。浴衣姿は初めて見るが、言葉を忘れて見入ってしまう。

神秘的ないでたちで立ち尽くすココノエは、目的の無さに隔世の感を漂わせ、身動き一つせずつただ静かに周囲の人を眺めている。

彼女は仲間だ。ユージと同じようにゴローに誘われて秘令選挙に参加し、ユージと同じように現世に舞い降りた故人だ。

ココノエは、ゴローが集めた仲間たちの中では比較的多くの言葉を交わした相手である。ココノエ側にどう思われているか二の次として、少なくともユージは友人としての親愛の情を抱いている。

現世に戻ってきて何度か顔見知りに出会った。あちら側でココノエとは頻繁に顔を合わせた仲だったが、現世に来てからは初対面である。

ココノエは普段から浮き世離れした価値観を纏っていたが、目の前の光景はとびきりだ。あたかもおとぎ話の浦島太郎のように、見知らぬ世界に放り込まれた迷子の風姿。ただしその姿からは、おとぎ話のような狼狽えや困惑の気配が感じられない。

遠目でココノエを眺める。ふいにココノエと目が合い、そして無視された。

現世に戻ってきても生来の性格は相変わらずのようである。

「久しぶりだな、キューちゃん」

「キュージャナイデス。ココノエデース」

挨拶みたいなものだ。

九重と書いてココノエと読む。彼女はその名を名乗り、ゴローが愛称をつけた。親しみを込めてキューちゃんと呼ぶ。

勝手に押し付けられた愛称は、ココノエ自身には気に入られていないようで、キューちゃんと呼ばれる度に「ココノエです」と訂正している。大抵は心此处にあらずに棒読みなのだが。

ゴローやユージが愛称を口に、ココノエが棒読みで訂正する。一連の会話は、仲間内の認識ではこんなにちやに類するやり取りなのだ。

「こんなところでなにやってんだ？」

「人間観察かな。なんとなくだけど」

「ふーん。まあなんというか、相変わらずのご様子で」

「まあねー。だってやることないんだもん」

「へー、もう任務終わったんだ。大したもんだ」

「やんないよ、あんなの。面倒くさいもの。自由にあちこち見て回りたいし」

「はあ!？」

至極ココノエらしい言動と行動なのだが、それでも吃驚した。

誘われた秘令選挙ではあったが、ココノエは割と協力的だった。ゴローほどに精力的な活動をしてはいたわけではないが、ユージの知らない間に様々な有権者と交流し顔を売っていた。

ゴローに連れられるままに唯々諾々と振り回されていたユージと違い、自由行動ながらもココノエは独自のさじ加減で下準備を重ねていた。ユージの中の印象では。

「おいおい、それはまずいだろう。まだ時間は有るんだから、投票してくれた恩義に報いる為にも任務を果たそうや」

「や。なんか気が向かないんだもん」

「だもん、じゃねーよ。キューちゃん、いくらなんでも契約不履行はあかんだろう」

「ココノエデース。ま、ほとんどが自分勝手な願いばかりだったし、別に恨まれようと一向に構わないし。マジメナアナタではなく、私にお願いしたのがそもそもの間違い。ミルメガナカッター。それだけよ」

所々で棒読みの目立つココノエの言葉に、ユージのそれとは違う価値観に思わず嘆息する。

変なところで頑固なココノエにいまさら何を言っても無駄だろうが、言うべき事は言わせてもらう。

「来たくても来られない人がいるんだぞ。お前さんの方こそ自分勝手じゃないのか？」

「なに？ ユージって親なの？」

「そりゃ違うけどさ。筋が通っていないって、そう言っているんだよ」

「あっそう。ゴコウセツイタミイルワー」

不意にすーっと。ココノエは人の波に消えてゆく。

「任務は気が向いたら適当にやっとくから。じゃあねー」

唐突に話を打ち切れ、話し相手はそでを翻す。ココノエの反応をみるに、依頼主の願いが実行される望みは薄いだろう。

どんな人にどんな願いを託されたのだろう。果たせない願い、果たしてもらえない願い。二つの意味で無念だろう。

徐々に見えなくなってゆくココノエ。その後ろ姿を再び遠目で眺める。

ユージにはどうする事も出来ない。ココノエが委任されている願い事はどんなものか何も知らないのだから。そう自分に言い訳をしつつ知らぬが仏と決め込み、心変わりするココノエの良心に期待する。

まるで教科書の端に描かれたパラパラ漫画のようにココノエは突然に現れ、突然に消えていった。

§

自然と足が向いたと評すべき心地に包まれている。多少なりはココノエの自由さに感化されての行動だろう。

請け負った任務を完遂してはいないが、少くくは自分の為に時間を使っても罰は当たらないと思う。誰に対してではなく自分自身に対しての言い訳を無意識で考えながら、何度も訪れた事のある見慣れた霊園へ足を運ぶ。

瀬川の家名が刻まれた墓石の四方では、幾つもの淡い光が揺らいでいる。線香独特の香りが混じる風が白提灯を優しく撫で、和紙に囲まれた蠟燭の灯火が柔らかな明かりを放っている。

親族の死を弔う初盆に何度となく立ち会ってきたが、目の前の重々しい光景を目にすると、言葉では表現できない不思議な感傷に浸ってしまう。

自分のお墓参り。生前、こんな日が訪れるとは夢にも思わなかった。

墓石の傍にある、墓に収められた故人の目録にユージの名前と没した日が追記されている。

改めて思い知らされる。瀬川ユージはもう死んだのだ。約一年前のこの日に、いつの間にかこの世を去っていたのだ。

瀬川のお墓は霊園にある。当然この空間には他家のお墓が無数にある。

見渡してみたところ、初盆を向かえたであろう装飾に祭られた墓石も多い。そしてユージのように、遠目で遺族の様子を眺めている霊魂もまた多い。

知っていそうで知らない顔の彼らとすれ違いざま、お互いに会釈を交わして苦笑する。やりきれないというか、むず痒いというか、あえて言葉を交わさずとも表情の確認だけで相手の心情を理解出来た。ユージの感情も大同小異なのだ。

ココノエに倣うわけではないが、何も考えずに霊園を行き交う人々を眺めていると、実家の墓前では見知らぬ参拝者が線香を供えていた。心なしか嗚咽しているようにも見える。遠縁の従兄弟だろうか。

誰なのかは知らないが、死を弔ってくれるのはありがたい。参拝者の背後にいる霊魂と共に、ユージの墓に向かって黙祷を捧げている姿を見ていると、理由なく心が晴れやかになってゆく。

見知らぬ参拝者がこちらへ歩いてくる。目を腫らしているようだから、本当に泣いていたのだろう。その後ろに付き従うかのように、先ほどまで参拝者と共にお祈りを捧げていた霊魂もやってきた。

小さく会釈をしたところ、女性の姿をした霊魂は微笑み、ユージに向かって話し掛けてきた。

「お久しぶりです。瀬川ユージさんで、よろしいですね？」

この人は誰だろう。少なくとも人ではない。ユージと同じ霊魂であるのは間違いない。

ゴローが集めた仲間の一人であろうか。此方は知らないけれど、向こうはユージを知っているようだ。

「えーと、すいません。どこかでお会いしましたっけ？」

「あ、そっか。正確には初めましてでした。そっかそっか」

「ゴローの知人の方でしょうか？」

「貴方のいうゴローさんがどなたかは存じませんが、貴方には是非もう一度お会いしたいと思っていました」

見知らぬ参拝者が隣を通り過ぎてゆく。この人は生きている。だからユージを視認出来ない。
「あ、あ、ちょっと一緒に来てもらえませんか？ 訳あって私、この子から離れられないんです」
言うなり女性の霊魂は視界から不自然に消えた。先ほどユージの隣を歩き去った見知らぬ参拝者の元まで、何かに引き寄せられるように飛び去っていった。比喻すれば限界まで伸びきったゴムが突然縮んでしまったかのように。

「瀬川さーん！ 瀬川ユージさーん！ お暇でしたら一緒に来てもらえませんかー!!」

見知らぬ参拝者の背後から大声を張り上げている。ユージを見定めながら大きく手を振り、そのまま手招きをしている。

霊園にいる他の霊魂達がユージらの動向を遠巻きに眺めている。「なにごと？」と言わんばかりの表情を向けられている。いつの間にか居心地が悪くなってきた。

見知らぬ参拝者へ向けて足を動かす。呼びかけに応じる決意を固めるのに、そう時間は掛からなかった。

見知らぬ参拝者の後ろへ付き従う女性の霊魂。彼女はナナコというらしい。特に催促した訳ではないが、ナナコは進んで一通りの自己紹介をしてきた。

そこまではいい。自己紹介の最後に発した締め言葉が問題だ。思わず語気を荒げて聞き返してしまった。

「背後霊って、そんなものが本当に居たんですね。迷信だと思ってました」

「私は守護霊だと自認しています。もう彼此二十年は越えていますよ」

「……そうなんですか。にわかに信じられませんが、本当なんですよ？」

「もちろん。まあ、それはそれとして、」

ナナコは立ち止まってお辞儀をしてきた。ユージに向かって深々と、見知らぬ参拝者に引っ張られるまでずっと微動だにせず。

「ああーん。失敗失敗」

擬音にしてびよーん。物理法則を無視した横っ飛びで元の位置に戻った。参拝者の背後まで。

何のコントだろう。ナナコの奇行に呆れ顔を返す。

「ユージさんには心からのお礼をしたいとずっと思っていました。いま若干失敗しましたけれど」

生憎だがユージはナナコを知らない。秘令選挙の関係者であれば顔見知りはあるが、それでもないらしい。

話を聞く限りだと、ナナコは二十年以上前から背後霊として現世に留まり続けていると云う。

残念ながら、ユージの人生の中でナナコと出会う機会はない。死せる人と生ける人の間には、目には見えなくとも確実に存在する明確な線引きが成されている筈なのだ。

ユージのものさしで分析すると、ナナコの言葉の意味が解らない。

「ときに、ユージさんはご自分の死を覚えているのでしょうか」

「いえ、残念ながら。知らないうちにこうなっていました」

「そうですか。ではただお礼をではなく深謝をしなければなりませんね」

ナナコの顔に影がさす。それも一瞬の出来事で、哀愁の漂う表情を捨てて口を開く。

「ユージさんは交通事故に遭われて命を落としました。そしてその時、この子を助けて下さいました。非礼と受け取られるかもしれませんが、本当にありがとうございます」

交通事故で死亡。記憶は曖昧だが、言われてみるとそんな事があった気がする。靄が掛かっていて想い出せないけれど。

「心苦しいですが、ユージさんの死は貴方の勇敢な行動によって助けられたこの子の身代わりとも言えます。本当に申し訳ありません。そして本当にありがとうございます」

ナナコは何度も深謝し、何度も感謝した。涙で顔を歪めながらお辞儀と横っ飛びを繰り返した。

ひとつしか仕事を与えられていない自動人形のように、ナナコは同じ行為をユージに対してのみ延々と続けている。その姿を見て、霊園から場所を移していて助かったとつくづく思った。

「もういいです、ナナコさん。顔を上げてください。充分にわかりましたから」

些か度を越えた鬼気迫るナナコの行動に顔が引き攣る。操り人形のように同じ台詞、同じ行動を取るのだから、見ていて痛々しくなる。

ユージが止めなければ永遠に同じ事を繰り返すであろうナナコ。彼女にはきちんと伝えないといけない。ユージの偽らざる本心を。恨みなど微塵も抱いていない事を。

「人の役に立てて本望です。むしろ誇ります。それに、悲しみだけではなく感謝をしてくれる方に出会えて胸が一杯です。自分の人生は無意味じゃなかったと、心から救われます」

ユージの言葉に聞くなりナナコは動きを止め、そのまま大声で泣き崩れた。見知らぬ参拝者と離れられない体のまま、大粒の涙と共に泣き続けた。

全く面識のなかった見知らぬ誰かに出会った。彼女は、ユージの中では些細な出来事に心から感謝してくれる。

感謝に対する返答は感謝しかない。ユージはそう思っている。

ナナコから流れ落ちる涙の量だけ心が洗われてゆく。無力感に絶望しかけていたところに、ナ

ナコの言葉は突き刺さった。

何も出来ずに古びた墓の前で立ち尽くしたユージ。そんな自分でも役に立てた事実がある。

腐りかけた心を入れ直し、静かに業火を燃やす。

仕事はまだ残っている。最大限の誠意、最大限の努力。それらを全て絶対に変え、戻ってきた意味を現世に刻み込んでみせる。

死者の無念を晴らしてみせよう。託された願いを叶えてみせよう。

自分にしか出来ない事は必ずある。ならば何が何でも探し出して成してみせる。自分にしか出来ない事を全力で。

§

作為すら感じる偶然には驚かされる。

もはや偶然を通り越して必然なのではと、根拠もなく疑ってしまう。

力になりたいと申し出たナナコの善意に便乗したところ、手の付けようの無かった任務があっさり完遂した。完全に予想外である。

これは偶然なのか、それとも仕組まれていたのか。考察を要する種は尽きない。

「こんな偶然があるなんて」

ナナコ自身も驚いている。当然ユージも驚いている。

「まさかユージさんが今年の伝言配達人とは思いませんでした」

請け負った任務は様々であり、決して一筋縄ではない。難易度においても上から下まで千差万別が基本である。年に一度、お盆の時期にしか叶わない願いなのだ。人の数だけ異なる願いがあるのは想像に難しくない。

意識的に後回しにしている指令を除けば、基本的には手を付け易い指令を優先的に処理している。そのため手の付けようのない指令は、結果的にまったく手を付けずに終わる可能性がある。

。 時間は有限だ。限られた時間の中で一つでも多くの任務を果たしたい、というのがユージの心情である。

背後霊として二十年以上も現世に留まっている状況から鑑みても、ナナコはこちらとあちらの事情に明るい。依頼主が指定した届け先の名前にナナコが含まれている偶然を笑い話に、箸休め程度に切り出したところ、ものの見事にど真ん中を撃ち抜いてしまった。

「ぜひとも教えて下さい。今年はこういったものなののでしょうか？」

「あー、えー、あー、うー」

口籠ってしまう。しどろもどろになってしまう。頼まれた任務は難しくないのだが、内容が内容だけに尻込みしてしまう。

先程まで泣いていたナナコは、今は満面の笑顔をこちらに向けている。正直やりにくい。

意識的に避けていた任務はいくつかある。諏訪氏のもそうだし、問題の相川氏のもそうだ。

後回しにしている理由はそれぞれで意味合いに差があるけれど、機会がやってきたら果たすのが筋だ。個人的な感情論で一年越しの願いを反故にするのは躊躇われる。

今になって思う。ココノエに余計な説教をするんじゃないかと。おかげで良心の呵責が大きくなってしまった。じわじわとココノエの皮肉が胸に染みる心地である。

煮え切らない態度で誤魔化そうにも、そうはいかない。ここまで来たら後はやるしかないのだ。

。 焦点である相川氏に委ねられた指令。要約すると「愛する妻子への伝言を届けてほしい」というものである。伝言というとなさしたる含みは無いけれど、仕事の内容よりは伝える中身が問題である。

愛する妻子へ、が枕詞の伝言である。この時点で危険信号が灯っている。

聞けば相川氏は毎年同じような指令を候補者に託しているらしい。党にとっては常連の依頼主であり、いつまでも転生をしない事も相まって、むこうでは一つの顔である。なんというか、はた迷惑な御仁なのだ。

伝言の内容はいわゆる恋文に類するそれで、五・七・五・七・七の短歌である。

一年にも及ぶ推敲期間を経ているので、文学としての完成度も無駄に高い。邪気のない純粋な愛を原料として綴られた短歌は、当事者には平気でも他人には毒な代物だ。聞いてもいないのに細かく解説をされたのだから、むず痒くて悶えてしまう。

短期間ではあったが、雅な詠み上げ方も相川氏には教わっている。力の入れようは本気だ。年に一度の恋文短歌。乙女ちっくで浪漫ちっく。教会の神父様のように愛の伝道師になりきって、一言一言心を込めて短歌を口ずさむ。朱の混じる面持ち。ナナコはどこか憂愁の笑みを浮かべて聞き入っていた。

羞恥的な任務はやっと終わった。
ナナコが幾度となく「もう一回」と所望するものだから、後半はやけくそ気味になってしまったが、それでもナナコは目尻に涙を浮かべて感激している。涙腺が弱いのだろう。
「昔は旦那も一緒にいたんです。この子の魂に引き寄せられて、二人でいつもこの子の後を付いて回ってました」
ぽつりとナナコは呟く。
こんな短歌を贈ってくる相川氏の事だ。絵に描いた愛妻家で、ナナコの事が好きで好きでたまらないのだろう。ナナコ本人も満更でもなさそうなのだから、一組のバカップルが出来上がりだ。

背後霊の二人が四六時中イチャイチャしているのだ。見えも聞こえもしないだろうが、お子さんはさぞかし迷惑だったであろう。
「いつの間にか旦那はいなくなって、私だけが残りました。寂しかったですね。よく泣きました」

遠い何かをみるように、ナナコは焦点の合わない目で空を見上げる。
相川氏が去ってからは、無意識に心に仕舞っていた過ぎ去った日々の思い出話。
涙腺が弱いのは承知している。ナナコはよく泣く人のようだ。ただし涙を武器にしているわけではなく、単に感受性が強すぎて湧き上がる感情を抑えきれないのだろう。
「それからです。毎年旦那から短歌が届くようになったのは」
ナナコの弱さを知っている相川氏は手を打った。毎年行われる秘令選挙の候補者に短歌を託して、話し相手もない現世に一人取り残されたナナコを励ます事が相川氏の愛なのだ。
「旦那から短歌が初めて届いた時、また泣きました。次の年にまた届いてまた泣きました。しだいに毎年が楽しみになってきて、今では季節外れの七夕恋愛を満喫しています」
ナナコは自身を織姫と自称し、相川氏を彦星に見立ててしていると語る。
毎年欠かさず相川氏からの短歌が届けられるお盆が、ナナコは大好きだという。

「相思相愛なんですね」
「はい。最愛の旦那です」

ナナコは宙を漂わせていた視線を戻す。全てを包み込む聖母のように優しげに微笑んでいる。相川氏が短歌に込めた想い、きっと伝わったのだろう。表情にそれが現れている。
死を越え時を越え、純愛ここに極まる。静かでどこか落ち着く笑顔のナナコ。相川氏はこの笑顔に心を奪われたのかもしれない。愛した分だけ愛される二人の関係は素直に微笑ましい。
感謝されて謝られて泣かれて強請られて微笑み掛けられる。感情豊かなナナコの眩しさに当てられて、柄にもなく心を乱してしまうユージュである。
相川氏め、見せつけてくれやがって。誰にも聞こえない心の声でユージュは一人ごちるのだった。

三 転向

事件が動き出した。

一時期は世間を賑わせた殺人事件は動き、約一年ぶりに新たな可能性が見えてきた。

時期にしてまさに今。偶然に偶然が重なり合い、保留としていた指令を再び呼び起こす。

話し相手に飢えていたナナコの相手をしている中、ふいにテレビのニュースキャスターが事件の速報を読み上げた。

ユージは瞬間的にナナコとの雑談を打ち切り、事件のあらましを確認する。

「本日未明、かごにわ食環の強制捜査が始まりました。同社では一年前、副社長の桐沢カズヤ氏が殺害されておりますが、桐沢氏の死については当時から多くの謎が噂されておりました。それが今回、数々の噂を裏付ける重要証拠品が匿名で届けられた事により、事実確認を含めて再捜査の運びとなりました」

これもまた偶然なのだろうか。ナナコの件といい桐沢氏の依頼といい、偶然の頻度がやけに高くないだろうか。

必要な情報を一通りに入手した後、話し足りない雰囲気 of ナナコに別れを告げる。ナナコは不満そうであったが「何かあればご相談下さい」と小さく手を振りながら見送ってくれた。

ナナコのあの顔は一を聞いて十が返ってくる顔だ。

年に一度は必ず相川氏からの恋文短歌が届こうものの、基本的にナナコは寂しがり屋なのだ。ユージに対して「上から三番目に好きです」と好意的な告白もしてくれたのもあり、時間を見つけたら話し相手になってあげようとユージは感じていた。

ナナコの無垢な瞳に後ろ髪を引かれながら、桐沢氏の事件に関する捜索に移るのだった。

時間は掛かったが事の真相に近付いてきた。

調べ上げた情報によると、桐沢カズヤは社内の派閥争いの急先鋒として度々上層部と対立姿勢にあったらしい。その背景がある中で刺殺されたわけだが、実行犯というのが同僚にして親友であった八木容疑者との事だ。複雑な人間関係が絡んで桐沢カズヤは謀殺されたのでは、というのが世間に流れた噂の概要である。

そんな中、人々の間では忘れかけられた事件が約一年ぶりに動き出した。

匿名の告発状に添えられた重要証拠品は当の会社に関わる不正を暴くものであり、株式譲渡の履歴や水増し決算の裏付け、人事記録など多岐に渡り、内部告発でなければ明るみに出ない情報が主であった。

誰がいつからこんな情報を。戦々恐々で会社を見つめる従業員の姿がテレビで繰り返し放映され、一方では国家権力の具現と思しき集団が家宅捜索に踏み込んでいる。

桐沢氏殺人事件は、どこかの誰かの勇氣ある行動によって再び世間の注目の的になるのだった。

刑務所の面会室で予想外の邂逅が待っていた。

桐沢氏殺人事件の渦中の人・八木容疑者と面会している人物に、あのゴローが憑依していたのだから。

ゴローはユージに気付かず、アクリル板越しで八木容疑者に話し掛けている。その二人を端で観察しながら、同室している刑務官は手にした記録用紙に時折文字を記入している。

「兄さん。桐沢さんの事件、今日ニュースで取り上げられてたよ。強制捜査だってさ」

「……そうか」

「そうかって、兄さんは嬉しくないの？ 兄さんを陥れた奴等が裁かれる時が来たんだよ」

「それは違う。桐沢さんを刺したのは嫉妬からくる自分の弱さだ。会社は関係ない」

「違う、違うよ」

八木氏の親族、おそらく弟と思われる男性は涙する。ただし泣いているのはゴローだ。

憑依された人間は、憑依されていた間の記憶を失う。聞いた話なので詳しくは解らないが、例えるなら深い昏睡状態に陥るらしく、寝ている間は憑依する靈魂に身体活動の全てを移譲するのだと云う。

つまり、泣いているのはやはりゴローだ。

「兄さん、なんでだよ。なんでだよ……」

「羨ましかったんだよ。同い年で同期入社だけれど、自分と違ってどんどん昇進していく桐沢さんが」

八木容疑者は感情の失せた目で独白を続ける。

「桐沢さんに恨みはない。事ある度に同期のよしみで目を掛けてくれたのだから、むしろ感謝している。ただ同時に憧れと嫉妬がどんどん大きくなって、自分でも感情が抑えられなくなって、気が付いたら刺していた」

ゴローは歯がゆい面持ちで八木容疑者を見つめている。何度も顔を振り、下を向いて奥歯を噛み締めている。

ユージは悟った。そうすることか。何だこの光景は。端から見たら失笑ものの茶番ではないか。

八木容疑者との会話から得られた情報と今の状況を加味して整理したところ、ゴローと桐沢カズヤの同一性をユージは確信した。そして会社を告発したのはゴローだろうとの憶測を立てた。

重ねて推測だが、現世に留まれる期間内には裁判は始まらないだろう。近日中に証人喚問で呼び出されるであろう八木容疑者に真意を問いただす機会は、今のうちに直接面会をしなければ永遠に訪れない。ユージ達が現世に留まれる時間が短い。しかも一度きりなのだから、時の価値は金をも越える。

ゴローが聞きたいのは今の八木容疑者が発する台詞ではないだろう。ゴローの反応を見ての感想だが、ゴローは八木容疑者を恨んではない。

ただ理由が知りたいのだ。信じていた親友の口から、ゴローの納得する理由が聞きたいのだ。

やるべき事を吟味して、成す為の方法を実行する。

ゴローと八木容疑者の会談において一人邪魔な人物がいる。面談の内容を逐一記録している刑務官だ。彼に恨みはないが、しばらくの間はぐっすり眠ってもらおう。彼はこの場に相応しくない。

「八木さん。腹を割って自由に話して構いませんよ。私の名は瀬川ユージ。貴方の目の前に座っている桐沢カズヤさんと同様、一緒に現世に降りてきた仲間ですから」

ゴローと八木容疑者がユージを見る。困惑の表情はしだいに安堵へと移り変わり、二人はもう一度目を合わせた。

しばしの逡巡。ぽつりぽつり。やがて八木容疑者は内に秘めた事件の裏側を話し始めた。桐沢カズヤと親友関係だった八木容疑者に目を付け、会社の上層部が接触してきた事。いつの間にか不正に巻き込まれていて、そのまま圧力を掛けられた事。そして桐沢カズヤの死とその後の会社の対応などを包み隠さずに全て話した。

八木容疑者は何度もゴローに謝罪した。ゴローはその度に「気にしていない」と返答し、八木容疑者の告白は続いてゆくのだった。

部外者であるユージは一言も発言せず、当然記録など取ることもなく二人の会話に耳を傾ける。

二人は本当に仲がよく、しだいに話題は昔話に変わっていった。時折お互いを愛称で呼び合い、親友関係であったのだと節々で強く感じられた。

面会の制限時間ギリギリまで二人の話は途切れなかった。終わり際にゴローは一言「死んだらまた向こうで会おう」と残し、ゴローと八木容疑者の面会は終了した。

二人して刑務所に背を向け、何処という当てもなく歩き出す。

しばらくは無言で往来の人を眺めていたが、あえてユージが口火を切って沈黙を破る。

「呼び方はゴローでいいんだよな？」

「……ああ。全部終わった話だ。俺はゴローだ」

虚をつかれたゴローは直ぐに平静を取り戻す。

「そういえばさ、ゴロー。お前さん、現世に戻ってきたい理由ってなんだったっけ？」

「あー。愛用のハードディスクをテローンと塩漬けにしてくれたか確認したい、だったかな」

「結果はどんなのさ。ちゃんと処理されてたの？」

「跡形も無かったな。ファーって風に私物は全部処理されてた。ま、その辺は予想の範疇だったから大して気にもならんよ。ドゥーンって感じ」

相変わらず微妙な擬音が目立つ口調だ。

出会った初期は「頭の緩い人なのだ」と先入観を持ったものだが、よくよく会話を重ねる内にゴローの軽薄な喋り口の別の側面に気付いた。

ゴローは微妙な擬音を用いる事で、話の内容から気を逸らすよう意図的に誘導しているのではないか。

人には触れられたくない裏がある。本質を突かれれば口籠ったり口調が変わったりと、それぞれで反応が変わる。普段からおかしな口調を続ける事で本質を隠し、加えて微妙な擬音を混ぜる事で、会話の相手は微妙な擬音に対して反応する。結果として話の内容から気が逸れて微細な違いを見落としてしまう。

会話の節々で耳に残るゴローの微妙な擬音は、裏で計算された自衛行為なのではないか。特にココノエと話すゴローを見て、ユージの中のゴロー像はこの結論に達した。そして黒いと。

「ユージはどんな感じなんだ？」

「特に戻りたい理由なんてなかったから、黙々と任務をこなしてるよ。キューちゃんに真面目だねって皮肉を言われたけど」

「おー、キューちゃんも無事に来られたんだな。そうかそうか。懐かしいな」

「相変わらず何を考えているか解らない風体だったけどな」

ゴローと二人で笑いあう。

あれだこれだと主に秘令選挙に関する思い出話に花を咲かせ、苦労話や依頼主との出来事を話し合った。他党からの度重なる妨害も然り、固定有力者層と繰り広げた裏工作も然り、有効票の九割以上を独占しての大勝も然り、ゴローは党首候補に挙げられている事も然り。

懐かしの回想録。思い出を共有するゴローとの雑談は盛り上がった。

「ゴローはこれからどうするの？」

「んー。任務は全部ニョーンと終わったし、ユージの手伝いでもしようかね。ちょっち借りが出来ちゃったからな」

「おいおい。お前さんの貸しが一つだと思うなよ。狩生弦聖の件は一時期本当に恨んだぞ」

「あれはほれ、ユージの精神修行には持って来いだっтар。結果的に大成功で終わったんだし、もういいじゃん」

カラカラとゴローは笑い飛ばす。

ユージが書き上げた狩生弦聖の譜面は、あの後まもなく世に公表された。

現存した未完成交響曲の最終章。新聞では歴史的発見と大々的に銘打たれ、テレビでは連日ニュースで取り上げられ、今は専門家によって検証されているらしい。ユージが関わっている出来事が世間を賑わせているのはどこか新鮮な気分である。

「あ、そーだ。ゴロー、桐沢氏から息子の死について調べてほしいって頼まれてるけど、どうする？」

「ううーん。難しいな。どうしょっか？」

ゴローは思わず口籠る。眉をひそめた渋面でゴローはうなるが、明確な答えを返すことは出来なかった。

「お前さんの口から伝えなよ。作り話でもいいからさ。親御さんに安心してもらう為にはゴローが直接伝えた方が効果的だと思う」

「ん。わかった。その件はこっちで引き受けよう。これで貸し借り無しな」

「そんなわきゃない」

「だよなー」

とぼけるゴローを尻目に今後の方針を模索する。

ユージにはまだいくつも指令が残っている。ゴローは全部終わったと言っているが、多分嘘だ。彼は秘令選挙で最も名を売った筆頭候補者であり、多くの願い事を託されているだろう。

ゴローは優れた才覚を持つ人物である。だが物理的に不可能な量の指令を言い渡されれば、処理に終えない指令は残るはずだ。選挙演説であれだけ熱烈に思いを語った手前、ある程度は任務に時間を割いたのだろうが、本質的にゴローの目的は過去の清算であると予測する。

決死の野望ともいうべき一つの目的が達成された今、ゴローは何を優先して動くのだろう。ユージの中ではその判断が出来なかった。

なにせよゴローが手伝ってくれるのは心強い。ユージと共に行動する事によって、ゴローが託された任務が果たせず仕舞いになる可能性も浮かび上がるが、ゴローが「全部終わった」と言いきったからには信じるしかない。

時間は有限である。人手はあって困るものではないのだ。

「じゃ、さっそく手伝ってもらおうよ。とりあえずは」

一声ゴローに呼びかけて反応を待つ。ゴローは即座に了解の旨を告げてくれた。

§

金持ちの道楽とは得てして気まぐれである。時にはた迷惑でもある。

良くも悪くも知る人ぞ知る有名人。企業連合で莫大な富を得たとされる寺本氏は、生前に自身の遺産の全てを世にばら撒いたというと言う。公になっている遺産はほんの一部であり、死後何十年経った今でも現在進行形で財宝は眠り続けている。それが寺本氏に関する世間の風説である。

。今の時代、企業連合は原則的に禁止だが、法の整備が不完全な時期は合法である。

無慈悲なまでの独占構図を築き上げた寺本氏を揶揄して、人々は「寺」という独自の単位を作った。意味は「人生の何倍」というもので、例えば「千寺円」であれば一人が人生で得る収入の千倍という解釈である。

数ある伝説の中の笑い話の一つだが、それほどまでに寺本氏の推定財力が群を抜いて異常なのだ。

寺本氏が隠した財宝は一部しか発見されていない。

宝の地図と思しき資料は新旧合わせて数十枚あるとの事だが、それでも尚、寺本氏が得た富の全てを満たすには至らないとされる。

「宝の地図を描いて欲しい、ねぇ」

胡乱な眼差しのゴローは、呆れ顔でユージに話しかけてきた。

「寺本財宝伝説って、もはや都市伝説の一種だと思ってたよ。つくづく怪しいダバツとした任務だな」

「それを言わないでくれよ。自分だってそう思ってるから」

「にしてもさ、ユージ。依頼主がそもそも寺本氏本人だっていう保証もない訳だし、しかもこんなファサツとした絵で宝の地図って。ピューな子供の落書きじゃん」

「わかってるよ。自分の印象も同じなんだって」

思わず溜息が漏れる。書き上げた宝の地図とやらの改めて目を落とし、もう一度溜息が出た。

ゴローの評価通り、子供の落書きが其処にある。

波打つ一筆一本線の山の中腹に×印、その印に向かって矢印が伸びて「このへん」と文字が掛けられている。金峯山だか長屋山だか知らないけれど、こんな適当な地図で宝探しを断行する人は相当に稀だ。ある種で尊敬する。

「あと何枚書くんか？言っとくが今回のユージの頑張りはいさ意味がないと思うぞ」

「人が気にしていることを真面目に言うなよ。あと二、三枚書いて終了だ」

「そりゃ難儀だな。まあピロポロ頑張ってくださいな」

ゴローは手伝う素振りも見せず、退屈そうにあちこち見回している。

つい先程は手伝うと言ってくれたが、任務の内容を話した途端にやる気が削がれたようだ。解らないでもない。ユージでも同じ行動をとるだろう。

それくらいに荒唐無稽な地図なのだ。狩生弦聖の場合と百八十度違い、世に出すべきかを最後まで悩んでしまう。ナナコに感化されて燃え上がった炎が早くも鎮火の危機である。

ああ無情。次の任務も気が向かないが、今の任務はそれ以上だ。

「次の任務こそゴローに手伝ってもらおうよ」

「ほほう。そりゃどんなのだ？」

「有り体に言えば身辺観察だ。諏訪氏の依頼なんだけど、ちょっとした知り合いなんだよね」

ゴローは言葉の意味を悟ってか深く聞こうとはしない。「解った」とだけ頷いて、頭を掻いている。

「そういやユージ、寺と依頼でバーンと思い出したけど、和泉（いずみ）から接触を受けてる？」

「受けてるね。和泉氏から。仲間の仕事を手伝って欲しいって」
「あー。それ無視していいよ」
「なんでさ。ゴローも重複して依頼を受けてたのか？」
「うーんと、詳しくは言い難いけれど、」
歯切れが悪い。言うか言うべきかを迷ったゴローは一度言葉を切る。
ゴローは視線を泳がせて頭の中を整理し、再び口を開く。
「まず和泉は家名じゃなくて団体名な。で、表の顔は除霊降霊口寄せ祈祷とかの祭事全般を司っている団体なんだけど、裏ではアンディな感じの相当にエグい事をしてるわけよ」
「えぐい？ なんか曖昧だな」
「一応見てきたんだけどさ、一言エグいってのも俺らみたいな霊魂からの視点でエグいんだよ。現世の客には良心的だし、事業自体もある種で心の拠り所と認知されているけど、裏の顔はエグいといしか言いようがない」
秘令選挙で出来るだけ多くの候補者を当選させる為の根回しとして、ゴローは固定有力者層の一角である和泉とも接触していた。そして票を入れる交換条件を突きつけられた。
和泉の名は現世では強大だ。ゴローにはある種で馴染みの集団であり、事業の概要は大筋で把握している。交渉時で突きつけられた交換条件の意味と和泉の事業内容を照らし合わせ、その上でゴローは笑顔で承諾したのだった。
尚、これらはユージが預かり知らない交渉場での話である。
「とにかく和泉は止めとけ。ユージの真面目さは危険だ。絶対に後悔する」
「若干興味が沸いたけどな。真剣な忠告みたいだから考慮するよ。優先順位を一番下にしとく。たぶん手が回らない」
「ああ、そうしてもらえと俺も安心だ」
ゴローはおおげさに胸を撫で下ろした。
「キューちゃんはいいいのか？」
「あの子はたとえ命令されても拒否するだろうさ。俺よりもよっぽど内情に詳しいだろうからな」
会話はそこで終わった。ユージは黙々と寺本氏の依頼に従事する。
数分後、やっとの思いで地図の製作を終えて席を立つ。仮初めの作業部屋を後にし、その足で郵便受けへ向かう。
宛名無しで宛先無し、送り主も無し。封の糊付けもせずにそのまま投函。
依頼の内容はあくまで地図を描いて欲しいという内容である。世に公開するかは局員のさじ加減に委ねて任務完了と断じさせてもらう。
最大限の誠意と最大限の努力はここで尽きた。絶対とは難しいものだと改めて感じさせられる瞬間であった。

偶然が偶然でなくなった日、何から疑うべきかを最初に問わなければならない。
ただし別段に疑心暗鬼に陥るのではなく、陰謀説に火をつけて誰かを疑うだけだ。そうしなければ、自分の中の偶然の定義が音もなく崩れてしまうのだから。

気の向かない諏訪氏の依頼。内容は「孫の様子を見てきてほしい。そして守ってほしい」。
子煩悩ならぬ孫煩悩。可愛くてたまらない孫娘の成長を知りたいから、代わりに見てきて結果を教えて欲しいとの事。そして補足の願い「守ってほしい」は他ならぬユージだからこそ、あえて託された台詞だと推測する。

なぜなら諏訪氏の孫娘、諏訪レイコと瀬川ユージは、生前に恋人関係にあったのだから。

ユージ自身は覚えていないのだが、後々にレイコから聞かされた昔話がある。
題して、ユージとレイコの二人の出会い。

小学校の頃、レイコは苛められていた。

子供の苛めは些細な理由で始まり、あとは惰性で続いてゆく。やがて始まりの理由を忘れてしまうものだから、終わりを導く手立てもない。

苛めの発端は本当に些細なきっかけだ。レイコの本名は諏訪レイコ。語呂にある「座れ」がクラスメイトの耳に残り、仕切りに連呼されて苛めが始まった。事ある度に名前で命令され、気の弱いレイコは言い返せずに唯々諾々と従うのだった。

学年が上がると共にクラス替えが行われ、学校側の配慮でクラスメイトは刷新された。その時レイコとユージは同じクラスになった。これが最初の出会であり、何よりも僥倖であった。

レイコに対する苛めはクラスメイトが入れ替わった事を期に一時沈静化したが、それでも根は消えていなかった。

誰かが意図せずに「座れ」を口にする度にレイコは怯え、その姿を見たクラスメイトが理由を調べて訳を知り、言いふらした事によって苛めが再発した。レイコにとっては悪夢の焼き増しである。

ここでユージが登場した。一言「で？」とクラスメイトに尋ねたのだ。続けて「その何が面白いの？」と問いかけて、レイコを含めた皆が呆気にとられた。

クラスメイトの回答に的を射たものではなく、疑問が更に疑問を呼び、ユージが様々な視点から理由を問い続けた。結果、クラスメイトが自らの行いの意味の無さと底の浅さに気づき、そのまま苛めは終息した。

流行りものは廃れも早い。ユージが発端の流れが決定打となり、レイコへの苛めは撲滅された。

ちなみに当時のユージは、別にレイコを助けようと思っていたわけではない。

皆が何を楽しんでいるのかを単に知りたかったのだ。笑いのツボが分からないというか、周りが熱くなって楽しんでいる姿を見て、笑いを理解出来ずに皆の輪に混ざれない理由を教えて欲しかったのだ。

ユージにとっては何の事はない日々的一幕で、単なる知識探求の一端だが、当人のレイコにしてみればユージは救世主だった。絶望しか感じない学校生活にユージが一石を投じたのだ。一時はユージの後光を幻視した程に感謝をしていた。

二人は期せずして出会った。

レイコのユージへの感謝が好意に変わるまでに、そう時間は掛からなかった。

小学校の出会いでも既に兆候が現れているが、ユージは鈍感でレイコは内気なのだ。

二人は小学校で出会い、その後は中学、高校、大学と同じ学校に通い続けた。ユージは適当に学校を選んで進学し、レイコは後を追って進学した。

付き合い始めたのは高校三年生。

ユージが部活を引退して勉学に本腰を入れる時期を見計らって、レイコが何年間も貯め続けた勇気を奮い立たせて、二人は付き合い始めた。この時からユージ内のレイコの位置付けは、顔も

知らないその他大勢から顔見知りの個人となった。

付き合い始めはぎこちないものだった。鈍感と内気の組み合わせでは歯車が思うように回らず、お互いに些細な行き違いを繰り返した。喧嘩こそしなかったが、度々に遠慮しあうお互いのもどかしさは、徐々に相手の考え方を理解する上で非常に役に立った。

結果的には二人それぞれの性分が功を奏した。双方とも不器用を自認しているのだから、いつの間にかあるべき場所にすっぽり収まった。

付き合い始めて数年。初々しい恋人関係が周回遅れで出来上がったのだ。

二人の逢瀬は続いた。蜜月の日々はレイコの秘めやかな夢の具現である。レイコは毎日が楽しそうだった。ユージ自身も満更ではなく、付き合い当初の「なんとなく」感は愛情へと確実に成長していた。

将来の結婚を約束して、二人は学生生活を謳歌していた。

桃色の日々は、死が二人を分かちまで続いた。

一通りの事情説明を終えて、ユージは足を止める。ゴローもそれに倣って足を止めた。

「ユージがそのレイコさんを大事にしているのは解った。それなら尚更、何故に俺に頼む？」

「なんていうか本当に弱い子なんだよ。繊細というか、神経が細いというか、割れ物みたいに脆いんだよ。だからさ、少し惚気もあるけど、自分が死んだ事によって嫌な話ボロボロになってる気がする」

やり切れないとユージは嘆息する。そんなユージに対して「ユージとは真逆だな」とゴローは感想を漏らす。即座に「お前さんに言われたくない」とユージも反論する。

重い話が方向を逸らされて和やかに変わってゆく。

「見てこいっていえば、そりゃタラガン見てくるよ。でもユージはそれでいいのか？」

「迷ってる。自分はレイコに何もしてあげられないし、仮にお前さんの時の様に面会なんてしたら、そのまま自害をしそうな程に思い込みの激しい子だから尚更ね」

苦渋の表情を浮かべる。

出来ればレイコには、ユージの死を乗り越えて強く自立してほしいが、予想の上で望みが薄い。出会いから十年以上レイコの中心に居続けたユージの存在は簡単には消せないだろう。

分かり易い嫉妬こそ見せなかったレイコだが、ユージに依存はしていた。他者と交流するユージを暖かく見守っていたレイコは、心中では最後には必ず自分の元に戻ってくると確信していた。最後には自分を助けてくれるという、ユージへの信頼がそれをさせていたのだ。

レイコにとって心の拠り所である肝心のユージは逝去した。突然の衝撃に折られた心は修復するのだろうか。ユージにとっては気掛かりだったが、背反して怖かった。ナナコのように泣き崩れるレイコを前にしても、無力な自分は何も出来ずに絶望する事が怖かった。

「だからお前さんの偵察結果を聞いてから、顔合わせをするかは再考するよ。……くれぐれも嘘は付くなよ？」

「なんだよ。シンヨウシテヨー」

棒読みでココノエの口真似をするゴロー。普段からこういう人間である。利に聡くよく気が利く。ときおり何を考えているか解らなくなるが、そんな飄々とした姿を何度も見てきた。

秘令選挙では筆頭候補を務め、数えきれない程の候補者を纏め上げたゴローだが、以前ゴロー本人は自身を「二番目で輝くタイプ」と分析していた。それを聞かされたユージは「ああ、黒い参謀役ね」と納得していた。

レイコの自宅へ向かう途中、見慣れた大通りに差し掛かった。昼夜問わずによく往復した歩道である。自然と頭に地図があり、方位を気にすることなく現在地が分かる。

ユージもゴローも人の道に従う必要はない。すり抜けられるのだから。それでもあえて建物を透過することなく道沿いに歩き、やがて角を曲がり、否応なく違和感に気付いた。

普段は無秩序に騒ぎ立てている通行人は静止していた。異常な光景だった。

そのうち誰かが悲鳴を上げ、喧騒は周囲に伝染してゆく。これも異常な光景だった。

がやがや。誰かが救援を呼びかけている。

がやがや。居合わせた人々は一様に携帯電話を操り、何処かに連絡をしている。

がやがや。人集りが早足で移動を開始し始めた。

がやがや。人の波を掻き分けながら警察官が中心を目座している。
がやがや。救急車の甲高い警報が徐々に近付いてくる。
がやがや。視界が開けてきた。どこかで見覚えのある光景だ。

「ユージ。これって」
「交通事故みたいだな。——んんっ」

何か違和感を覚える。何かは解らないが、どこか見覚えがある。
ナナコが言うには、瀬川ユージは交通事故に巻き込まれて死んだ。脳内を支配する強烈な既知感、ユージ自身の死に際を思い出した結果であろう。けれどなんだろう。表現できない心地悪い違和感を拭えない。

よりによって今日、交通事故を目の当たりにするのは偶然なのだろうか。
数多くの任務に関わり、密度の濃い時間を重ねてきて、その度に偶然の意味を問い直した。どこまでが偶然でどこからが必然なのかが曖昧模糊。ユージは混乱する。
「どうした？」

「何か思い出せそうなんだ。ちょっと待ってくれ」
血に染まる車は建物に激突してひしゃげている。横断歩道の真ん中には数人の負傷者が横たわり、道路が血色に染めている。遅れて到着した救急隊員が負傷者に駆け寄り、警官の面々は人垣に呼びかけて交通整理を行っている。

あの日の光景が少しずつだが頭に浮かんでくる。細かい描写は欠落しているが、暴走した車が減速の気配を見せないで人垣に突っ込んできたような、そんな朧げな映像が脳裏に流れてくる。
場所は違えど、似たような状況を見た事がある。

ユージが過去にみた走馬灯の開始直後、コマ送りで事故の現場を確かに目撃していた。どこか目の前の光景に似ているのだ。

違和感の根源はこれだ。そして偶然を信じられないのは、拭えない違和感が根源だ。

「ゴロー。なんか大切な事を見落としてるかもしれないぞ」

ユージはぼつりと呟く。小さい声だったのでゴローは聞き取れなかった。
「なんだって？ 何か言った？」
「ゴロー。お前さんが死んだのは約一年前だったよな」
「そうだな。それがどうした」
「自分が死んだのも約一年前だ。さらに交通事故で死んでいる」
察しのいいゴローは早くも違和感に気付いたようだ。説明する手間が省けるとユージは感心した。
偶然は何度も起こるものでは無い。最近感じていた違和感の正体はこれだ。

考えが至らなかった。でも完全に理解した。ただし情報が足りない。
諏訪氏の指令を思い出す。付け足すように一言添えられていた言葉は確か「守ってくれ」だった。そう言う意味の指令なのか。解りにくい。とユージは思わず愚痴をこぼす。
誤解かもしれないが、秘令選挙に関するもう一つの可能性を見つけ出した。
背筋も凍る机上の空論だ。ユージとゴローで共有した認識が間違っているのであれば、それが一番いい。杞憂であり早とちりであれば、そのまま笑い話にすればいい。
仮説を立証するのもにも否定するのもにも情報が必要だ。その為には、より信用のおける情報が必要だ。年に一度しか来られない者の推測論ではなく、毎年状況を知っている者の観測論が必要だ。

偶然、ナナコに会う理由が出来た。
誰かを見つけた様子のゴローに「いくぞ」と一声掛け、ユージは足早に事故現場を立ち去った。
。

ナナコの元に向かう途中、ユージ達が立てた仮説を肉付けする具体的な情報が舞い込んできた

。目的も行く宛もなく歩き回っていたココノエが、偶然にも交通事故の現場に居合わせたのだ。ゴローが顔なじみのココノエを人混みの中から目敏く見つけ出し、声を掛けて同行させた。

「ああ。ヒトガシンデタネー」

いくつかの質問を投げ掛けた返答として、ココノエはさも興味も無さげに言い切った。

棒読みでどこまでも無機質な口調にはさすがのユージも苛立った。感情に任せて激昂し、ココノエに掴みかかろうとしてゴローに止められた。止めた側のゴローもココノエの態度には思うところがあり、複雑な心境ではある。

「なによ。質問に対して事実を述べただけじゃない。レイセイニナッテー」

「キューちゃん。今のお前さんはむかつくな」

「ココノエデース」

いつもの台詞を聞いて、無意識にココノエと交わした雑談の記憶を掘り起こした。

ココノエに怒りをぶつけても仕方がない。そもそも「何に怒る」と自問自答し、客観的に自分を俯瞰して冷静さを取り戻した。先の先を取られて感情は傍に受け流され、徐々に頭が冷えてゆく。

「あー、すまん。頭に血が昇ってた。もう大丈夫だ」

「そ。ゴローも落ち着いた？」

「うーん。こりゃパッカリ面目ない」

ココノエは大きく溜息を吐く。「オトコハコレダカラ」と愚痴をこぼし、牙を抜かれた二人を見定める。

「で、状況を聞きたいって話よね」

ユージは頷き、ゴローは言葉を待つ。「あまり思い出したくはないけれど」としかめっ面でココノエは言葉を紡ぎ出す。

「往來の最中に車が突っ込んで来た。避ける間もなく数人が轢かれて死んだ。車の運転手も壁に激突して死んだ」

箇条書きの文言を読み上げる風に抑揚なく告げる。ココノエは一度言葉を切り、脳内で続きを簡潔にまとめて語りを再開する。

「死者の靈魂はほとんどあちらに行ったみたい。一部は人波に消えたけどね」

「つまり、俺たちみたいな存在が引き起こした、と」

「たぶんね。見物での状況証拠しかないけれど」

ユージは目を閉じる。今から問いかける質問を口に出してよいものかと考察する。

しばしの無言。ユージ自身、ココノエを信頼している。嘘は言っていないと信じている。だからこそ問わねばならない疑問がある。

「お前さんが主犯でないと、信じていいんだな？」

「好きに思えばいい。悪魔の証明なんてフカノウデショウ？」

不敵に笑うココノエ。

肝の座った凶太性格は、常に自由闊達で挑発的なココノエその人を象る魅力の一つである。

ただしユージから見たココノエ像と、ゴローから見たココノエ像は異なる。

ココノエとの邂逅は、ユージは死後からだが、ゴローは生前に何度か顔を合わせている。ゴローとココノエはお互いに最初から顔見知りである。

ユージは生前のココノエを知らない。なぜならゴローやココノエは基本的に生前の話をしないのだから。二人共あえて隠している訳ではないが、心の片隅で語る価値がないと判断し、忘れたい過去だと切り捨てている。ユージのように真っ直ぐな人生を歩んだ人間と比べると、ゴローやココノエの人生は主観で歪んでいるのだ。

「それならいい。キューちゃんも一緒に来てくれ。ナナコさんを紹介する」

無防備なユージの発言は地味に爆弾発言だった。

ゴローは玩具を貰った子供のように満面の笑みを浮かべて「愛人？ 不倫？」とからかい半分の問いをしきりに連呼し始めた。そのまま流れるようにレイコの話を持ち出した辺りから雲行きが怪しくなった。

ココノエは再び「オトコハコレダカラ」と棒読みの皮肉を吐き捨てた。心底侮蔑した表情がなんとも凄絶である。

「違う違う違う。ただの知り合いだから！」

慌てて弁明するユージ。本気の度合いを計り兼ねるココノエの皮肉に、ユージは誠心誠意に全力投球で弁解した。

まるで妻に浮気を疑われて糾弾されている夫のような答弁は新鮮である。

夫婦漫才のような二人の珍しい光景にゴローは手を叩いて大爆笑。ゴローは揚げ足を取っては火に油を注ぎ、意外に潔癖な恋愛感を持つココノエを煽ってはユージを狼狽させ、数分前まで漂っていた陰鬱な空気を霧散させるべく場を和ませた。

ナナコの居場所に辿り付いた。

着くまでの道中のやり取りに疲れたユージは心なしかげっそりしている。それらの事情をまったく知らないナナコは、来訪したユージとその他面々を喜色満面で歓迎し、言葉でもその心情を素直に吐露した。

「来てくれたんですね。ユージさん、またお会いできて本当に嬉しいです」

ココノエは氷点下の笑顔でユージを見つめる。ユージは親しげなナナコに視線を向けたまま、決して後ろを振り向かない。遠巻きに眺めるゴローは、手で口を覆って笑いを堪えている。

「ナナコさん。本当の事を教えて頂けませんか？ 瀬川ユージの死は、ただの事故死だったんですか？」

背中に刺さる視線を無視し、ユージは真剣に問いかける。

告げられた問いを理解したナナコの笑顔が凍り付く。ユージの開口一番の台詞だけで来訪の理由を察したナナコは、表情を殺して目を瞑る。

しばしの回想。一年前の我が子の動向を思い出し、ユージの事故現場の映像を再生する。

「ユージさんの推測通り、あれはただの交通事故ではありません」

ナナコは「黙っていてごめんなさい」と頭を下げた。

此処まではユージとゴローが導き出した仮定通りである。問題はこのあとの台詞だ。もしココノエが告げた内容をナナコがまた言い出したのなら、単なる偶然は作為ある必然へと格上げされる。

「二つの要因が重なっていました。今のユージさん達のような方々の力が働いていました」

「自分は殺されたんですね？」

「……はい。車の運転手に憑依した誰かと、この子を助ける為にユージさんに憑依した方の手によって、ユージさんは命を落としました」

「そうですか」

ユージは自らの死を知り、偶然を装った作為を受け止めた。

目を瞑る。沈思黙考。ココノエやナナコの証言を飲み込み、思考の海に意識を沈める。

お盆は毎年日本全国で行われる降霊行事である。

秘令選挙もまた、お盆に合わせて毎年行われる降霊行事である。

死者は霊魂となってあの世に運ばれる。そしてあの世の人口は転生によって調整されている。

輪廻転生。霊魂は廻り、いくつもの生を転々とする。転生は基本的には希望者を優先して実施される。必要に応じて意志を無視した強制転生も行われるが、こちらは気付く暇もない。

この世とあの世。二つの世に存在する霊魂の総和は常に一定である。

動物は元より、虫にも草にも石にでも霊魂は宿っている。片方が増えれば片方が減り、逆の場合も同様に一定に調整されている。

転生は次の生へ進む儀式だ。ただし人が転生をして、次も人になれる保証は無い。虫になる可能性もある。運良く人への転生を果たせたとしても、霊魂は浄化の洗礼を経て記憶は全て洗い流される。そしてまっさらな状態で新たな人生を歩むのだ。

霊魂自体に刻まれたこれらの情報は、あの世に着いて掘り起こされる。現世の人間の三大欲求のように、教えられる事なく自然に理解する真理である。

記憶の喪失を気にせずさっさと転生する霊魂もいれば、いつまでも留まり続ける霊魂もいる。

留まり続ける主な理由は、根源的に突き詰めればすべてが悔いである。果たせなかった悔いは願いという名に表現を換え、代理人で達成出来るように無駄が削ぎ落とされる。些細な願いもあれば、自分本位の身勝手な願いもある。

一度死を体験した靈魂にとって、死は理解可能なものである。現世に残る人々とは異なり、死への恐怖を忘れ去った存在なのだ。飛躍して死を軽んじうる存在でもあるのだ。

恨みを晴らす者もいるだろう。靈魂としての楽しみを早く教えたいが為に、誰かを意図的に殺してあの世に引き込む者もいるだろう。可能性はゼロでは無い。

例えばの話である。

仮にナナコと相川氏の血縁者が未だに留まり続けていたとして、一方では短歌の伝達を頼んだとする。そして他の血縁者が遺族の護衛を願ったとしたらどうなるだろう。

投票してくれた義理は果たしたいと感じ、依頼された上で護衛対象を死なせてしまったら、帰還した時に怒られるから嫌だと感じていたと仮定する。

依頼を託された靈魂は死への認識がそもそも歪んでいる。理解している故に怖くない。この状況が重なったとして、何が起こるだろう。

秘令選挙によって現世に解き放たれた靈魂たちが、全てまともである確率は如何ほどか。

限りなくゼロであろう。請け負った任務そのものが既に人道的に歪んでいる可能性を否定出来ないのだから、常識を捻じ曲げた不可解な行動をとる靈魂がいても不思議じゃない。

悪魔の所業を立証しようとして、逆に冤罪を主張されようとも、そもそも悪魔の証明は不可能である。陰謀が無い事を証明するよりも、陰謀の存在を詳らかにする方が圧倒的に容易なのだ。

それが現実なのだ。

ユージは偶然を信じない。信じないから確信する。身勝手な不条理という、陰湿な悪意の存在を。

沈痛の面持ちのナナコは、ユージに掛ける言葉を見つけられずに目を逸らし、ゴローやココノエに視線を送る。ココノエは無反応を決め込み、ゴローは音もなく首を振る。

沈黙が場を支配する。ユージは目を瞑ったままに二の句を告げず、ずっと口を閉ざし続ける。

ナナコの泣き様が脳裏に去来する。今になってユージはあの時の涙の裏側を悟った。

伝えるのも苦痛、伝えぬのも苦痛。ユージの死に心を痛め、ナナコは呪鎖で身を縛って泣いていたのだ。

ナナコは決して嘘を付いていた訳ではない。言えなかつただけだ。

我が子が助かった安堵は確かにあった筈である。ただ言い出せなかつたのだ。ユージの本当の死に様を。それが辛くて、ぶつけ所のない苦悩は涙となり、ナナコは泣くしかなかったのだ。

跡形もなく崩壊した世界観。ユージは裏に蠢く悪意に怒りを覚えた。そして秘令選挙の存在を諸悪の根源と断じ、同時に善良な靈魂の純粋な願いをも一緒に否定する自分の狭量に胸を痛めた。

出口が見えない袋小路に迷い込み、答えを見つけては否定を繰り返す。どれだけ考えても納得いく答えが見つからない。

「ユージ。悩みがある時はダダーンッて感じで叫ぶといいよ。すっきりするから」

ゴローの助け船を聞いた途端、無秩序に繰り広げられていた並列思索が一点に集束していく。

目を開いて後ろへ振り返る。ゴローは意地の悪い顔でとぼけている。

「お前さんには呆れるよ。相変わらず黒いな。ありがとう。やっと考えがまとまったよ」

「なんのなんの。それで親友、これからどうするよ？」

ゴローはとっくに結論に達している。ユージの思考傾向を把握して、筋道を導き出せないユージを先回りして助言を与えて誘導した。

想定通りの答えであるかは解らない。それはそれで構わない。違えばより良き方向に訂正してくれるだろうから。

ユージは深呼吸をして一から整理し直す。その後、力強い口調でゴローとココノエに嘆願の言葉を告げた。依頼を受けた二人は「わかった」と言葉少なく返答し、各々は即座に散っていった。

「ナナコさん。貴方に会えて本当によかったです。ありがとうございました。そして.....さよう

なら」

時間を掛け、深々とお辞儀をしてユージは立ち去る。

ナナコは無言で手を振り、その行為をユージの後ろ姿が見えなくなってもしばらくは止めなかった。

頬に伝う一縷の涙は持ち前の涙腺の弱さに起因するのだが、どんな感情が高ぶって流れ出ているのかをナナコはついに特定出来なかった。

終（三 転向）

四 結束

無人の野外会場に見知った顔ぶれが続々と集結し始めている。
人はいない。人でない靈魂たちが集められるべくして集まっているのだ。

懐かしいものだ。空白期間はそれほど空いていないにもかかわらず、秘令選挙で同じ党に属して共に戦ってきた同志達を見渡していると、あちらで過ごした日々が思い起こされる。

何の因果で自分は此处にいるのだろうと、ユージは一人感慨に耽る。

思い起こせば過去の追憶。惑っている間に突然ゴローに話しかけられて始まったもう一つの生き方。一年近くにも及ぶ選挙活動を経て、ゴローの神懸かり的な演説をいくつも拝聴して、多くの候補者を同志として引き込んだ。

興味も示さずにさっさと次に進む人もいた。応援してくれる人もいた。共に活動してくれる人も集まった。望郷は尽きず、過ぎ去った思い出は今に続いている。

ナナコとの会談後、ゴローとココノエは先行して同志達に召集令を敷いた。ユージも仲間集めに参入し、数時間掛けて多くの顔見知りを一ヶ所に呼び寄せた。

口コミの伝言数珠つなぎを言い渡し、知り合い同士の連携連鎖を利用した伝達は功を奏し、電光石火の勢いで情報は駆け巡った。

ユージやゴロー、ココノエが最初の情報源となるわけだが、果たして末端に声が届く頃には情報劣化が著しく、口伝えの弱点が露呈した。

全国散り散りに降り立った靈魂達。ねずみ算式の上位にいた者が得た情報は最初の発信とさして相違ないのだが、徐々に内容は個人の主観や解釈によって変容し続けた。

曰く「俺達だけのお盆祭りを始めよう」と。

退屈を持て余していた靈魂達は、その刺激的な響きに耳が惹かれた。興味はなくなるとも聞いてみるだけならと、こちらも暇つぶしの一環として集まるものもいた。

各人それぞれの思惑とは裏腹に、まずまずの集会出席率をもって定刻は迎えられる。

言い出しっぺのユージは頭を抱えていた。土壇場になって会場の空気に気圧されてしまった。

伝えたい事は決まっているし、人畜無害な様相で自分勝手な指令を持ちかける、一部の心ない依頼主には腹が立っていた。それでも根は一小市民のユージである。分不相応を自覚してはゴローに代理を懇願した。

「やれるって。そんなに気負うなよ。演説ってのは特殊な技術をそこまで求めてないからさ」

ユージが経験した事のある発表は、せいぜい強制された研究発表くらいである。大勢の前で、目に見えた資料もなく原稿もない一人語りなど体験したがない。

ゴローはのりくりとユージの申し出を躲しながら、ちょこちょこと会場に集まった顔見知り達に声を掛けている。こころなしか、会場の空気を徐々に暖めているようにも見える。

先立って舞台に躍り出たゴローの姿を、舞台袖に控えるユージとココノエは静かに眺めていた。

「しゃんとしなさいな。オトコデショウ？」

棒読みで隣から叱咤するのはココノエ。底意地の悪い微笑みでユージに話しかける。

「なんならキューちゃんがやってみない？」

「ココノエデース」

一言だけいつもの台詞を返し、ココノエはそれ以上は語らない。つーんと無反応を決め込み、ユージに自発的な行動を促す。助け船は出すが、全面的に責任を委譲される気は毛頭ないのだ。

ユージは肩を落とし、目を瞑って意識を集中する。此处に集まった仲間たちに告げるべき出来事と推測と結果、そして願い事を整理する。同時にゴローの選挙演説の光景を必死に思い出す。

ゴローと皆の掛け合いが遠くから聞こえる。時折混ざる漫才のような語り口は気のせいだろうか。

代理演説はしないと言い切ったゴローだが、なんだかんだで本当に頼りになる。誰に言われる事なく自発的に場をほぐす役割を担い、候補者の意識を舞台に集中させているのだ。最終的な責任者は発案のユージとなるが、ゴローはゴローなりの立ち位置で負担軽減に尽力している。

自分一人では何も出来ないが、ゴローやココノエが支えてくれる環境でならなんとかなる。ユージは改めて仲間の大切さを実感し、静かに目を開いた。

「そろそろ覚悟は決まった？」

優しい語り口でココノエが問う。

「……ありがとう。もう大丈夫だ」

ココノエは一言「そう」と残し、ゴローの元へ歩いて行った。

一通りの落ちをつけ、会場に呼びかけるゴロー。その視線を舞台袖に向け、ユージを見定める。

ゴローの元へ向かってゆっくりユージは進み出る。再び舞台袖に戻ろうとするココノエとすれ違う瞬間、「がんばって」とユージにしか聞こえない小さな応援が聞こえた。

「じゃあおめーら、そろそろパラッと本題に入らせてもらうぜー」

ユージを中央に迎え入れたゴローは一步下がって傍に控える。

会場は水を打ったように静まりかえり、舞台に招かれたユージに注目が集まる。

「一言だけテロツと言っとくぞ、ユージ」

ゴローはぼそりとユージに告げる。

「俺に成れると思うなよ」

どこかしら上から目線の助言が耳に響いた。その一言がユージの自縛を解き放った。

したり顔のゴローが実に憎たらしい。いつも一步先から、一段上から見守ってくれている。

そうである。その通りである。ユージがどれだけゴローの背中を追いかけても、それ自体がそもそもが間違っている。

ユージとゴローは違う。能力も経験も歩んできた人生も、何もかも違う。同じに成れずとも、真似は出来ると思いつめる必要はないのだ。そして自分を必要以上に卑下する必要もないのだ。

いつもの自分を認めてくれるのなら、いつもの自分をあえて変える必要もない。

心が開けてくる。あとは思うがままに吐き出せば、止め処なく勝手に台詞が流れ出てゆくだろう。似た感覚を知っている。既に経験済みだ。

狩生弦聖に向けて思いのままに言葉を吐き出した、あの時の再現をすればいい。

始めよう。瀬川ユージの一世一代、最初で最後の演説を。

「みんなに伝えたい事があります。そして、みんなにお願いしたい事があります」

来場者へ向けて前置きを告げ、ユージは胸に秘めた思いの丈を雄弁に語り始めた。

舞台袖で祈るココノエ。ユージを背後から見守るゴロー。静かに耳をそばだてる観客。

中央に立つ一人を除いて終始無言の中、粛々とユージの演説は続いていった。

ユージは演説した。もう一度自分の人生を思い出して、そして全てを捨てて欲しいと。

実際は独白だったが、そう精一杯に伝えた。

私は交通事故で命を落としました。その事をつい最近知りました。

初めはただの事故死だと思っていました。でも目撃者が云うには、ただの交通事故ではなかったそうです。

私を殺したのは、今の私のような存在です。秘令選挙で現世に降り立った悪意ある靈魂が引き起こした事故に巻き込まれて、私は命を落としたのです。

車の運転手に悪意ある靈魂が憑依して交差点に突っ込み、次々と通行人を轢いて殺しました。

私はその時に殺されましたが、その時の記憶は断片的にしか残っていません。重要な一部分が欠落しています。

なぜか。それは轢かれる直前まで、誰かに体を乗っ取られていたからです。

事故で死んだ私は、誰かを助けて死にました。私が助けた誰かは今を精一杯生きています。

私が助けた誰かを、仮にナナコとします。

推測ですが、ナナコを守って欲しいと依頼を受けた靈魂が、私に憑依して体を乗っ取り、事故

に巻き込まれそうなナナコを助けて任務を果たしたのでしょう。
そうして私は死にました。それから一年経って、今此処にいます。

そして今日も、数時間前に同じような交通事故がありました。
目撃者が言うには、誰かが車の運転手に憑依して、人混みに向かって突っ込んだそうです。
これは偶然でしょうか？
私には偶然を証明することは出来ません。
ただ、私が遭遇した交通事故と、今日発生した交通事故には裏があると推測しています。

なんにしても、偶然だと思っていた私の事故死は偶然ではありませんでした。
悪意と作為が外部から働いて、気が付いたら死んでいました。
そのことが解った時、とても衝撃的で思わず言葉を失いました。

過去には戻れません。悔やんだところで意味はありません。
実際、私は死を憎んでいません。もう済んだことなので、ありのままを受け入れました。
いまさら生き返れないのですから、怒ったところで状況は変わりません。

生前に果たせなかった心残りを忘れられず、転生をせずに留まり続ける方々がいます。
死後いつまでも現世に執着し続けるのは、未練たらしくて醜いと思いませんか？
自身に害の及ばない外側から現世に干渉し続けるのは、傲慢で醜いと思いませんか？
こうして欲しい、ああして欲しいと自分本位の任務を課すのは、強欲で醜いと思いませんか？

生前果たせなかった悔いを叶える代理人として、私は現世に降り立ちました。
託された任務をこなすのは当然として疑わず、善い行いをしていると誇っていました。
それらは間違いでした。思考停止による錯覚でした。

人の数だけ悔いがあり、悔いの数だけ願いがあります。
それらは本来、死を契機に捨てるべきものではないでしょうか。
現世に悔いを残したのであれば、そのまま悔いを現世に捨てるべきではないでしょうか。

心を無にして始めて解りました。考えれば解ることでした。
私がしていた事は、強欲な誰かを付け上がらせ、助長させているに過ぎません。

もう一度自分の人生を思い出して、そして全てを捨てて下さい。

たらればの話をまぜこぜにして、一度でいいので空想して下さい。
偶然なんて存在しない、作為的な何かが蔓延する世の中を想像して下さい。
見知らぬ誰かに操作された人生は、悲惨なものではないでしょうか。

心残りはあるでしょう。でも掘り起こしてはいけません。捨てなければいけません。
私達はもう死んでいるのです。どうやったって元には戻れないんです。

もう、不用意に世を乱すのは止めましょう。
もう、請け負った任務を果たすのを止めましょう。
もう、現世へのしがらみを捨て去りましょう。

ユージは演説した。全てを受け入れて、そして全てを放棄して欲しいと。
実際は独白だったが、そう精一杯に伝えた。

年に一度の秘令選挙を勝ち抜き、お盆に合わせて現世に舞い降りた靈魂達。彼らは一様に死を経験して理解した。

死を通過して靈魂となり、生前ではありえない数々の不可能が可能となった。期間限定ではあるが、生前には想像でしか描けなかった刺激的な日々が待っていた。

喜び勇んで自由に行動を始めた彼らに対し、ユージは集会を開いて戒めの一石を投じたのだ。

「私のような犠牲者を、もう出してはいけません。生きている人々は天寿を全うするべきです。懸命に生きている人々に、ある日突然やってきた招かれざる客が、外部から作画的に干渉するのは間違っています」

感情の昂ぶりに全身が震え、ユージは一種の高揚感に包まれていた。

「今を生きている人々を、見えない悪意から守れるのは私達を除いて他にいません！」

ユージは密かに右手で握りこぶしを作る。

「私はこれから、生きている人々を影から守ります。でも人手が足りません。だから皆さん、どうか手を貸して下さい。一緒に現世を守りましょう!!」

ユージは突如、空に向けて拳を力強く猛々しく突き上げた。

しかし反応はお粗末だった。

事前の分かり易い前振りもなく、いきなりユージが手を突き上げたものだから、聴衆はどうすべきか戸惑った。しばし時期を逸して「お、おう」と細々に言葉を発したものの、突き上げる拳も散発的で、足並みはまったく揃わなかった。

独白に全力投球して熱中しすぎたユージは、演説者と聴衆がそれぞれ抱く空気の温度差を把握していなかった。ゴローの助け船も間に合わず、案の定会場には微妙な空気が漂った。

舞台袖に控えるココノエは思わず額に手を当てて嘆息する。

その後はゴローが慌てて場を引き継いだ。ユージは大勢の拍手を以って舞台袖に見送られた。

一人残ったゴローは聴衆の注目を誘導する為に素早く「バサッと俺を見ろー!!」とすっとぼけ、しばらく他愛もない漫談を続けて場を和ませた。聴衆には、ユージの独白を反芻する時間が必要であると、ゴローは直感的に判断したのだ。

ある程度ほぐれた頃合いを見計らい、ゴローは改めて話を本筋に戻し、聴衆に具体的な方針、対策などを説明し始めた。

「なんか言う事はある？」

舞台袖に引っ込んだユージに対し、ココノエは開口一番に問いかけた。熱暴走気味のユージは「ない」と力なく言葉を絞り出し、そのまま腰砕けとなりへたり込んでしまった。

何でもそつなく器用にこなすゴローと、不器用ながら精一杯に取り組むユージ。相対する二人の姿を舞台袖で見守ったココノエは「親友か...」と消え入りそうな声音で呟いた。

集会はお開きとなった。一人、また一人と来場客が野外会場から姿を消し、それぞれの馴染みの地へと散っていった。

ユージを含めた三人は最後まで会場に残り、演説の内容に関して個人的な質問を投げかけてくる顔馴染みの仲間達に、懇切丁寧に対応し続けた。

やがて全ての対応が終わった。数時間前に巻戻ったかのような静寂が会場に訪れる。一陣の風が吹きさらし、寂寥の感だけが置き土産として残されていた。

「よくやった。ほらな、グリポンって出来ただろう」

会場に残る三人はこじんまりとした反省会を開いていた。

素直に褒めるゴローをよそに、ユージは納得いかない洪顔を浮かべる。

「反応が薄くなかったか？ 本当に伝わったのか不安だよ」

「あの反応は正常よ。気にしたら負け。ワスレナサイ」

煮え切らないユージの言葉を、ココノエは一刀のもとに切り捨てた。

ユージの熱弁に反して、会場の空気は一向に暖まる気配がなかった。内容が内容だけに来場者は困惑も見取れたが、喋る事だけで手一杯のユージには周りが何も見えていなかった。

演説者だけ自動的に燃え上がって、他は冷静に聴き続ける。

一見して独り善がりの独演会。ユージの拙さが目立った喜劇でもあった。

もはや回数を忘れるほどに場数を積んでいるゴローに比べて、誰がみても圧倒的に劣るユージの演説ではあったが、それでもゴローとココノエは評価していた。

やりきった。結果はどうであろうと動かぬ事実である。なにより得がたい経験なのだ。

「さてさて。こんな場所でリラッと油を売ってないで、そろそろ行きますか」

ゴローが早々に会合の締めを申し出る。他の二人も直ぐに了承した。

たとえ少数しか賛同してくれなくても、それはそれで仕方がない。集会を開くに先立って予め想定した一つの可能性が現実になったに過ぎないのだ。

伝える伝えた、解る解った。それは押し付けではなく、各人の主観に委ねるしかない。
なにせよ言い出しっぺが何もしないのでは示しがつかない。
そうして三人は、自分達で提案した方法に則る行動を開始するのだった。

ユージを含めたいつもの三人組は街を歩いていた。
周囲に目を光らせながらも、雑談をしながら歩き回っていた。

大々的な集会を開き、悟ったふりして独白し、締め「皆を守りたい」と仰々しく啖呵を切ったものの、実際に出来る事といえば高が知れている。

三人寄れば文殊の知恵に習い、集会を開く前に案を出し合ったものの、先鋭的で効果的な対策は立てられなかった。

状況は今よりはマシになる。三人共通の認識ではせいぜいその程度の方策で、自己満足の延長というべき簡素なものでしかないのだ。

自警団の設立。一言で表現すればこうなる。

内容も行き当たりばったりの感が拭えない緩いもので、声を掛け合おう、合言葉で仲間を認識しよう、そして語り合おう、というものだった。

ユージが提案した全面的な任務放棄。ユージが願った現世への干渉放棄。それらが無くなったら、送り火の時刻までは何をして時間を潰すか。

空いた時間をどう埋めるか。一番の悩みはそこだった。

任務もなく、現世への干渉——つまり憑依による人体操作も出来ないとなると、靈魂の皆々は暇なのだ。かといって、任務放棄を提案して別の任務で上書きするのは憚られる。

原則的には地位の上下差など存在しない平等な関係なのだから、正論を押し付けて完膚なきまでに説き伏せるのは危険である。下手に刺激すれば逆の結果を招く恐れもあり、原因は三人に降りかかってくる事態も充分にありえる話だ。

だから提案した。仲間達で寄り合って、集まり同士が声を掛け合って交流を深め、その合間に変な奴がいなか見回ろうと。

三人はあらゆる最悪の結果を思いつく限りでそれぞれ吐き出し、絞り出された仮説に肉付けして筋道をたて、原因となりうる些細な注意点を洗い出した。その結果、党内での付き合いしかない仲間達に反発を持たれないであろうギリギリの境界線を引いた。

それが、あまりにお粗末な自警団の設立だった。

では変な奴を見つけたらどうするか。

ユージ達三人は色々な実験をして、役に立ちそうな方法を見つけた。

人には人が見える。でも人には靈魂が見えない。けど靈魂には靈魂が見える。憑依していても

憑依された人に飛び込んで、憑依した靈魂を弾き出す。

一人で駄目なら二人で。それでも弾き出せなければ三人で同一の体に飛び込んで、誰かに憑依し操作する靈魂を弾き出す。それが実験の末に見つけ出した、有効的と思われる打開策だった。

以上を提案した上で、どれほどの協力者が得られるか。そこが最終的な焦点である。

ゴローの見立てでは「よくて二割」。ココノエも概ね同じ結論に達した。

続けてゴローは補足した。

「三割を越えたらキリッと大成功だ。様子見の中立層は得てして状況に流され易い。周りが楽しげにつるんでいる姿をみたら、勝手にパラードと参加率も上がるだろう」

二人に比べると人生経験の豊富なゴローは断言した。

「俺達にとって、現世は孤独な場所だからな」

ある意味で真理の一言でゴローは締めくくった。

その後もゴローとココノエが暴言まじりの議論を交わす中、ユージは一度も口を開かなかった。

。

街に目に見えた変化はない。現世の人の目では、集会の前後で何も変化していない。

目に見えぬ靈魂たち側の変化はどうかといえば、僅かずつだが祈りの萌芽は育ち始めていた。

「変な奴を見つけたって、他からそんな話を聞きましたよ」

ユージ達三人を見かけては、色んな仲間達が情報を共有がてらに話し掛けてくれる。

周りの状況をそれとなく聞き出すと、ユージの独白は思いのほか心に響いていた印象を受ける。当たり障りのない素朴で無害な任務ですら放棄するよう提案した事についても、請け負った側の靈魂からすれば別にどうでも良かったようだ。

任務遂行を生き甲斐に感じている者もいる。逆もいる。嫌々ながらも尽くす者もいる。けれど任務完遂を全面的に至上命題と掲げている者は実は少数であり、大部分は任務をこなす義務は自分自身の目的を果たした後の二の次、ついでなのである。

ユージ自身、任務自体は内容如何によりけりで一切合切を投げ捨てる決断には気が引ける。

狩生氏の件も桐沢氏の件も上杉氏の件も、基本的には害意のない純粋な願いだったのだから、それらと作為ある任務と一緒にするのは手前勝手の暴論であると理解している。

でもそれは甘えだ。いざという時の言い訳なのだ。

人としての生を終え、靈魂として転生を待つ身である。もう人ではないのだ。人としての甘え、やり残した悔いへの執着は現世を不可思議な形に歪める。ユージの持論は其処にある。

どれほど続いているかも解らない秘令選挙。

過去より脈々と何十年も何百年も続いていたとして、期間限定の現世への干渉が大問題になった事実は確認出来ない。少なくとも生前に二十数年お盆の時期を通過してきたユージが、お盆に対して「不思議な事が頻発する時期である」といった印象を持ったことがない。

ユージが危惧するほどの作為は、実際には微々たる干渉でしかないのだろう。

自分の行いに意味があるのだろうか。それがユージには判断できない。

迷いを断ち切る儀式として大声を張り上げた演説を行ったものの、迷いの払拭には至らなかった。ユージは未だに明確な答えを見つけられず、ゴローやココノエと共に空虚に街を歩き続けた。

見回りのさなか、ユージたち三人組の雑談は議論に様変わりしていた。

ユージとゴローが熱く語り合い、ココノエは一步引いた立場から全体像を把握して要所要所でたくみに誘導しては途切れのない話し合いが続いていった。

誰が最初に問題提起をしたかも解らない、根本的な原因の追求。

すなわち秘令選挙の存在理由について。

「案外、少数派の方がまともだったのかもな」

ゴローはふと漏らす。

秘令選挙の仲間集めの最中、幾度となく多党の妨害を受けて来た。「お前たちは間違っている」との枕詞を皮切りにゴロー達への全面否定をのべつまくなしに重ね上げた。ただし、したたかなゴローは状況を逆用し、自身の属す主流派に民意が傾くように綺麗事を並べ上げた。

結果、選挙は主流派の圧勝で幕が閉じた。議席とされる数の九割以上を独占した大勝だった。

ひとつ仮説を立てる。現世に舞い戻るのに議席は本当に必要なのか。

秘令選挙を通過した全ての死者が現世に戻れるわけではない。初盆であるという状況は必須だが、もう一つの必須条件は死者当人と現世の遺族の間にある強い絆の有無である。

では秘令選挙で争う議席は何の為にあるのか。

決して必須条件ではない議席。その必要性は何処に有ったのか。

「戻る気のある、または戻れる可能性のある初盆予定者の大々的な紹介幹旋」

三人は秘令選挙のもう一つの側面に目を向けた。

秘令選挙の勝者にのみ与えられる議席が降霊の必須でない確証はない。ただしその逆、議席を

得ている上でも絶対に降霊が出来る訳ではない、という情報は選挙活動中に投票有権者から聞いている。

主流派はユージ達が秘令選挙の存在を知った時点で既に存在した党だが、いつ誰が結成したのかは知らない。基本方針は「願い事の達成に尽力」だが、仮に初盆を過ぎて降霊が適わない未練たらしい集団が合同結成した党だとしたら気味が悪い。

未だに捨てきれない心残りに対して、党として全力を掛ける約束してくれるのだ。しかも投票という行為をするだけで、候補者たちに願いを託す権利が与えられるのだ。自然と民意は主流派優位に傾くだろう。

主流派が正しいとは限らない。主流派を選ぶ行為は、自身の状況を鑑みた最適解に過ぎない。

秘令選挙の裏側に隠れた作為的策謀に考えが至った者が、ユージ達を除いて前代に一人も現れなかったわけがない。理念の性質上で少数派として肩身の狭い思いをするだろうが、自身にしか出来ないという責任感が強い者達が集って諦めずに活動し続けている可能性がある。

あくまで可能性。推測である。それでも三人は淡い希望を見出した。

「あちらに戻ったらやる事が目白押しだ。なんかヌルッと面白くなってきたな」

状況を愉しむゴローを尻目にユージは黙考する。

数時間前の演説は見切り発車であったのだから、なおさら着地点は間違えられない。

一見楽観視しているゴローだが、基本黒いのだ。持ち前の神算鬼謀の謀を企てている節がある。実際の話、ユージとゴローの談義はユージにとっては勉強の場である一方、ゴローにとっては復習の場である。

「なにせよ知らない事が多過ぎる。あちらでやるべき事を考えたら気が遠くなるよ」

ユージは辟易した表情で楽しげなゴローに現実論を投げ掛ける。

「無知の知さ。知らない事を認識できて、初めてピョーンツと進めるもんだよ。な一、キューちゃん」

「ココノエデース。ま、ユージの無知は今に始まったことじゃないから。イマサラネー」

ココノエの相変わらずの反応にユージとゴローは安堵する。仲間というのは暖かいと、つれない態度からも親愛を感じ取る事が出来る。

「ユージ。絶対にやり遂げような。キューちゃんも一緒に」

ゴローは相棒として見初めたユージに諸々の話題を振っては器の程度を計っていた。

ユージ自身は、何だかんだで目を掛けてくれるゴローの思惑を薄々感じる場面もあった。だが事ある毎にあまりに遠いゴローとの差を見せつけられてきたのだ。「ゴローが自分に期待している」といった淡い妄想は湧き上がる度に打ち砕かれ、分を弁えて邪念を捨てるのだった。

それでもユージは答える。

「もちろんだ。今回の件も、あちらに戻って秘令選挙の有り様を変えるのも、どちらも自分の使命だ」

返答に満足したゴローは、ユージを相棒として選んだ事が正解だったと改めて確信するのだった。

街の見回りを兼ねた三人の談義は突然の来訪者によって終わりを迎えた。

三人の前に現れた来訪者は、ユージはおろか密かに顔の広いココノエでも思い当たる名前が解らなかった。そこは流石のゴローで、しばしの間を置きながらも来訪者を正確に認識する事が出来た。ごくあり触れた顔立ちであるのは否定しない。

「こんにちは、ユージさん。貴方の演説には感銘を受けました」

声を聞いた一瞬、三人は共通した感想を抱いた。この人はどこかおかしいと。

その動物적直感は、来客者が続けて述べた言葉を聞いて確信に変わった。やはりこの人はおかしいと。

彼は言った。人はすべからく自分勝手であり、自分本位の理不尽な要求を突きつけると。

彼は続けて発した。命は等しく平等で、不用意に天命を捻じ曲げる行為は傲慢であると。

彼は最後に告げた。死を望む者、死を受け入れる者、死を覚悟した者を止めてはならないと。

ある種で正論。だが受け取りようでは笑えない。

彼がどのような過去を歩んだのかは不明だが、薄っぺらい張りぼての表情で狂気の弁を並べ立てるのだから、壮絶な人生を経て曲がってしまったのだろう。次の瞬間に何をするか予測が出来ない不気味さは、まるでまとわりつく呪詛の様で身震いがする。

「人の死は尊いものです。時として美しいものです。誇るべき何物も持たない人ですら、死に際は輝くものです。生涯に一度きりの明滅、その荘厳さに勝るが出来事がこの世にありましょ

うか」
彼は何を言っているんだろう。ユージ達にその答えは見つけられずに立ち尽くす。

「貴方の演説を聞いたのはまさに福音でした。退屈な趣味に光が差しました。私は人知れず死を望む方の背を少し押すだけで、当人に訪れる死という結果を捻じ曲げませんが、貴方がたはその行為を否定しますよね。なら貴方がたとは、尊い死を巡って刺激的な合戦を繰り広げられるでしょう」

来訪者はいくつかの答弁を重ねた後、「では」と一言残して忽然と姿を消した。

直ぐに三人は理解した。来訪者は宣戦布告にきたのだ。

移動はイコールで行動開始の合図なのだ。来訪者を見つけ出して邪魔をしなければ死者が出る。それがたとえ元々死ぬ気の人間だったとしても見知らぬ他人が外圧で殺す行為は許せない。

探し出さなければならない。見つけ出さなければならない。

虎を野に放っては人心が乱れる。人里から追い払わなければ住民は安眠など出来ないのだ。

焦燥と共に加速する時間感覚は、否応なく三人を単一行動へと導いてゆくのだった。

§

知り合いに声を掛けつつ、来訪者の搜索が至急命題として続いている。

この容姿を見かけたら要注意。ユージ達はすれ違う仲間達らと情報交換を交わしながら、見知らぬ来訪者の早期発見に全力を注ぎ込む。

ゴローの記憶では、彼は医者だったと云う。

人当たりの良い柔和な表情からは些かの危険も感じられないが、いくつかの言葉を交わす過程で背筋が冷え、今では悪寒が止まらない。元医者である彼の内に秘めた狂気に触れ、絶句でしか反応が出来なかった。

「いくつかの目撃情報がある。おそらくこっちの方角だ」

ユージの演説の効果は徐々に浸透してきた。怪しい者の搜索協力を要請した所、思った以上に協力的な体制が出来上がったのだから、素直に驚いた。

ただ内情を子細に聞いてみたならば、ユージ達と同様の感情を抱く者がほとんどおらず、どうやら鬼ごっこ感覚で対象を追い詰める過程を愉しんでいるようだった。

任務もなく、現世への干渉を全面的に控えるよう御触書を発行したのだから、基本暇なのだ。

わざわざ宣戦布告までして「止めてみる」と言い放った来訪者がいるならば暇つぶしに丁度いい。退屈しのぎの良い機会だと、一部の事情通が遊び半分に煽った結果わらわらと参加者が名乗りを上げて、やがて数は一つの暴力となった。

目撃情報を束ね上げて進行方向を推測したところ、見慣れた場所に辿り付いた。

「自分はこっちにいく。ゴロー達はあっちを探してくれ」

待ち合わせの場所と時間を決め、個々の担当区域を割り当てた。仮に待ち合わせに来ないようだったら、その者の担当区域に搜索の手を伸ばすよう取り決め、三人は音も無く姿を消した。

ユージが自発的に担当した区域は霊園。実家の墓がある事もあり、何度も足を運んでいたのが見慣れた場所である。

「おや、またお会いしましたね」

背後から声が聞こえる。

「それにしても貴方がたと接触したのは正解でした。刺激的な時間をありがとうございます」

仲間総動員で探していた見知らぬ来訪者の声が聞こえる。ユージは即座に振り返るが、其処には来訪者は居なかった。改めて視線を正面に向け直すと、見知らぬ来訪者が人に飛び付こうとする様が見えた。

その先に見慣れた人物がいる。ユージは思わず凍りついてしまった。

見知らぬ来訪者の行動は予想の範囲内で、さして驚くべき光景でもない。ただ飛び付かれんという間も瀬川家の墓前で立ち尽くしている女性を認識し、それが全ての初動を遅らせた。

見知らぬ来訪者が見知った女性に触れる。憑依による身体への同期を経て、女性の体が小さく痙攣する。体を乗っ取られた女性は、常人には決して視認出来ない筈のユージに向かって顔を振り向け、ニヤリと笑った。

ユージはそれらをコマ送りで視認した。走馬灯で流れる映像の如く、秒をさらに細切れにした時間の単位で、時々刻々と移り変わる絵を見続けた。

「俺のレイコにさわるなー!!」

頭の中で弾ける衝動。心の底から全てを絞り出してユージは絶叫する。

声を発すると同時に体は宙を舞い、かつての恋人・レイコへ向かってユージは突進した。

暴走する力の脈動。物理原則を一切無視したユージの突進は、パラパラ漫画の紙一枚がめくれる間も空けずして目標地点への到達を可能にした。

ユージとレイコ、一年ぶりの再会は片方の忘我、もう片方の放心によって成されたのである。

瀬川家の墓前で慟哭するレイコの背後に立ち、ユージは形容のしがたい違和感に戸惑っていた。

無事にレイコの体から見知らぬ来訪者を弾き出したまではいいが、その辺りの記憶が判別不能なまでに混濁している。加えて意味不明な虚脱感が全身を覆っており、直ぐには動けないほど体力を失っている。

「ユージの声が聞こえた……」

ずっとである。ユージが気付いた時には既にこうなっていた。

レイコは消え入るような声でしきりに同じ台詞を繰り返していた。その度に感極まったかのように泣いていた。石作りの椅子に腰を掛け、整った相貌を涙で歪めて泣き崩れていた。

レイコに憑依した見知らぬ来訪者は居ない。何処に消えたのかも解らない。

ユージの全身を覆う虚脱感は未だに消えていない為に動く気にもなれず、なにより泣き続けるレイコを放っても行けない。何もできないユージは、せめて付き添うだけならとレイコの隣に腰かけて頭を撫で続け、体力の回復を図っていた。

「時間になっても来ないと思えば、ニョーンと何やってんだ？」

微妙な擬音言葉を絡めた口調と共にゴローとココノエが現れた。

二人の表情は軽口そのままのそれで、遅刻なんてどうでもいい様子で咎める雰囲気はまったく感じられない。極々普通の日常会話で話し掛けてきたかのように自然体であった。

「悪い。ちょっと体がだるくて休んでた」

悪戯が見つかった子供の様に、ユージは頭を掻きながら返答した。

「ナンジャクモノ。向こうで目撃情報があったから、さっさと……」

呆れたと言わんばかりの顔でココノエは苦言を呈し、その途中で墓石の家名に気付いた。ゴローも同様で、ユージの隣に座す女性を見て状況を察した。ゴローはそのままニヤリと笑いからかう。

「忙しい時期でも恋人との逢瀬はビリッと外せないってか」

「否定はしないが今回は偶然だ。ちょっと待ってて。すぐに行くから」

「モウイイノー？」

棒読みのココノエを無視し、ユージはレイコの隣から腰を浮かせる。レイコの前に立ち、綺麗な黒髪を撫でるように手を動かし「じゃあな」と小さく呟く。しばらくそのままの体勢でレイコを見守り続けるユージだったが、不意につばを返してゴロー達の元へ歩き出した。

はずだった。

猛烈な既知感に見舞われる。同じような光景を近い過去の何処かで見覚えがある。

擬音にしてびょーん。ナナコが特定個人から一定以上離れられない様に、レイコの元に引き戻されるユージ。何度やってもゴローの元に辿り着けず、急激に縮むゴムのような離脱は何度か続いた。しかもレイコから離れられる半径はナナコのそれに比べて極端に狭く、人一人分でも離れたならばレイコはユージを引き戻した。

一向に治る気配のない虚脱感の原因はこれか。そう、ユージは結論を導き出した。

「ゴロー。キューちゃん。度々申し訳ない。どうやら此処でお別れみたいだ」

ユージは大声で二人に告げた。

突然のお別れ宣言。意味を飲み込めないゴローは理由を尋ねたが、ユージの説明を聞いて苦笑した。ココノエとはいつものやり取りを繰り返した後、「ダメオトコ」と棒読みで皮肉を告げられた。

その間、レイコはやっと泣き止み、呆然と瀬川家の墓石を眺めていた。

るで赤い糸の様に、目に見えなくとも二人の間に確実に介在する一本の繋がりである。

ユージはレイコを愛している。レイコもユージを愛している。死が二人の生活を引き裂こうとも、お互いの心根は変わらなかった。

静止した二人の思い出。それが今、歯車の歯一つ分だけ廻るのだった。

「ゴロー。ココノエ。お願いがある」

神妙な面持ちでユージは告げた。

レイコの魂に惹き寄せられ、傍を離れられなくなったユージは二人に同行を懇願して事情あらましをすべて話した。

こうなってしまった状況説明。ユージの虚脱感。ナナコとの会話で得たいいくつかの情報。それら全てを話して、ユージは土下座をして願い事を告げた。

さもありなん。ゴローにしるココノエにしる、ユージの云う願い事は話の流れで必定だった。途中で十分に結果を予測できており、意外性も全くない素朴なユージの願い事である。心境に共感もした。

だからこそ、あえて問わなければならない。他ならぬユージであるからこそ。

「現世に干渉すべきでは無い。全ての悔いを忘れ、全てを捨てて下さい。だったかな？」

抑揚のない至って事務的な口調でゴローは耳馴染みの台詞を口にする。

「心残りを掘り返してはいけないって言ってたねー。未練たらしいのはミーニークーイーって」

ココノエも無表情でかつてのユージの演説内容を引き合いに出す。

ユージにとっては耳に痛い話である。言い出しっぺがまっさきに金科玉条を破ろうとしているのだから、自身の意志の弱さに虚しくなる。

それでもあえて頼む。ユージは恥をしのんで真っ直ぐに頼み込む。

「何も言い訳出来ない。何も弁解出来ない。それでも頼む。二人の力を貸してほしい」

ユージは力を失った。

秘令選挙の際に多くの投票者から請け負った任務。それらをこなす為に授けられた特別な力の数々を、全てレイコの魂に持っていかれてしまった。実際は持っていかれた訳ではなく、レイコの魂に惹き寄せされた瞬間に失っただけなのかもしれない。

どちらにせよ、ユージはただの靈魂になった。正真正銘、何も出来ない存在となった。背後霊としてレイコの傍に在るだけの存在となった。

もう憑依は出来ない。もう空間原則を無視した移動も出来ない。もう、ゴローやココノエと共にあちらに戻れない。

「頼む。頼む。もう、ゴローとココノエにしか頼めない。今を逃したら、もう二度と頼めない。だから頼む。二人の力を貸してほしい。お願いだ。頼む。頼む.....」

いつぞやの映像の焼き増しである。

ユージに対して懸命に謝罪を繰り返すナナコ。宿主が歩いて離れる度にゴムの様に引き寄せられて飛び去って行く。そのナナコと同じ事をユージも繰り返す。土下座の頼み込みを繰り返しては飛び去り、また土下座して頼み込んで数秒前と同じ光景が繰り返される。

ゴローとココノエは、ユージをここまで追い詰めるつもりは更々無かった。ちょっと意地悪をしてやりたいと思った程度で、本心でユージの願い事を否定した訳ではない。

ちょっとからかっただけ。初めはユージの一人喜劇を笑っていたが、段々と状況の深刻さを自覚するや慌ててユージを止めた。

ユージは病的なまでに同じ行動を繰り返した。あの時のナナコのように。二人は、ユージの鬼気迫る風体に顔を引き攣らせつつ、やっと事の重さを認識したのだった。

ユージは願い事を託した。信頼の置ける仲間のゴローとココノエに任務を託した。声高に演説までして叫んだ身の甘さを苦々しく噛み締めて懸命に頼み込んだ。

一生にただひとつ、最後の最後の心残り。死んでも死にきれない唯一のやり残しを晴らす為に、何が何でもやらなければならない事がある。

ただ純粹に願いを叶えてほしい。この気持ちに嘘偽りは無い。打算も計算も何も無いたった一つの悔いを解消してほしいが為に、現世への干渉を代理人に託す。

今ほど依頼主の心境を理解出来た瞬間はない。痛いほどに解る。これが願いの意味なのだ。

幾度となく矛盾した行動を繰り返すユージは、心底自身の意志の弱さに打ちひしがれた。

「本当にいいんだな？ 後悔しないな？」

ゴローは念を押して確認する。ココノエは「アリカモネー」と棒読みで反応しながら辺りをひらひらと舞っている。

「その内容で頼む。これで全てが終わる」

力強く断言するユージ。首肯にて決断の意志を示し、目で「やってくれ」と訴える。

「じゃあ失礼して。ドウナッテモシラナイヨー」

ココノエはレイコへの憑依行動へと移る。レイコと体を重ねたココノエは、心身の同期を開始し直ぐに完了した。体に乗っ取ったココノエはそのまま後方へ振り向き、ユージの居た方向に向かって片目をまばたかせる。上手くいったようだ。

ココノエは憑依に慣れていない。

元々任務をこなす気がまったくなく、好き勝手にあちこち歩き回っていた。加えて随所で垣間見た意外に潔癖な性格も相まって、結局今日まで指折り数える程度しか人に触れたことは無く、乗っ取った際も気分を害して即座に抜けだしていた。

かといって女性の体に乗っ取る行為はゴローには憚られた。

どちらが実行するかを検討した時、ユージがココノエを使命しようとする前に、ココノエが「ヘンタイ」とゴローに向かって小さく呟いた。その発言をもって憑依を極力避けていたココノエが、ユージの依頼を担当する運びとなった。

ユージの願い。依頼内容は手紙の代筆である。

相手はもちろんレイコであり、ユージが考えた内容をそのまま書いて欲しいというものだった。

レイコへ

久しぶり。墓の前でお前さんを見かけました。髪、伸びたんだね。

一年経ってもまだ泣いてくれるのは男冥利に尽きるけど、もう泣かなくていいですよ。

もう忘れて下さい。俺はもう死んじゃったんだからね。

いつまで足を止めているつもり？ そろそろ自分の足で歩いてみない？

レイコ。自由っていいものだぞ。お前さんにも自由のよさを味わってほしいよ。

自由に生きろ。好きに生きろ。自分で生きろ。色んな事がどうでもよくなる位に気持ちいいぞ

突然だけど、俺達、今日をもって正式に別れよう。

いままでありがとう。楽しかったよ。本当にありがとう。

いまのお前さんは好きになれない。嫌いだな。いつからそんなに弱くなったんだ？

でも、力強く生きるお前さんならまた好きになれると思う。

だから強く生きろ。お前さんは本当は強いはずなんだから。だから強く生きろ。

じゃあ、もう会うことはないけれど。

今まで本当にありがとう。お前さんと過ごした日々、本当に楽しかった。ありがとう。

ばいばい。さようなら。

瀬川ユージ

レイコの筆跡で綴ったユージの言葉。ユージは何度もココノエにお礼の言葉を繰り返した。ユージの指示通りに一言一句相違なく書き終えたココノエはすぐさまレイコから抜け出て体を

返却した。その後数秒の間を置いてレイコは意識を取り戻す。

「……うーん」

まどろみの中、徐々に覚醒する意識のレイコは、自身は泣き疲れて寝たのだろうと誤認した。しばらく安心してその場を動かなかったレイコは、水を補給しようと立ち上がって何かに気付いた。

机の上に無造作に置かれている便箋。いつぞやレイコが購入したものであるが、最近めっきり見かけなくなった。贈る相手もいなくなり、使わなくなっていたのだから。

「なにこれ……？」

自身の筆跡で書かれている文章を一行だけ読み、起き抜けでぼやけた頭が覚めてきた。

続けて二行目、三行目と読み進め、レイコの手は震え始めた。

その後どれほどだろう。レイコはひとり、またしても泣き続けた。

とある男性の氏名をしきりに連呼し、レイコは声を押し殺して身体を振るわせ続けた。

力なくへたり込むレイコ。その彼女をユージは包み込むように無言で抱きしめた。決して触れることの出来ない無力感に苛まれながらも、いつまでもユージはその行為を止めなかった。

この空間には、一人の女性と一人の靈魂のみ。ゴローとココノエは既に居ない。

レイコの慟哭は続く。ユージの抱擁も続く。

お互いの気が済むまでいつまでも、時間の許す限りいつまでも。

決して触れ合えない二人は魂で繋がりあい、いつまでも寄り添って一つの影を作っていた。

終（四 結束）

五 末筆

お盆が終わって数ヶ月。ユージの背後霊生活は続いている。
あの日を境にぱっさりと髪を切ったレイコに付き従い、ユージは今日も現世の日々を送っている。
特異な力はその一切合切を失った。話し相手も失った。それでもユージは悲観していなかった。
レイコが強く成長する様を間近で見守る喜びに、何物にも代え難い幸せを見出していた。

あの日、送り火の香りが日本全国に漂い出す頃、ゴローとココノエはひょっこり顔を見せた。
色々な話をした。秘令選挙の話、見知らぬ来訪者の搜索作戦の事、ユージに対して思っていた事、そしてこれからの事。取りとめのない話から考えさせられる話まで、ユージ達三人は雑談をした。
やがてゴローとココノエの体が透け始め、別れの時が訪れた。

「待ってるよ。あちらで待ってる。ユージ、一緒に秘令選挙を変えよう。だからさっさとレイコさんに見捨てられて、あちらに戻ってこい。ずっと待ってるからさ」

ユージが返答する間もなくゴローは霧散して消えた。
ココノエは何かの感情に耐えるようなぎこちない無表情でユージを見定めていた。ココノエの体はほとんどが消え掛けている。
「そういえば、キューちゃんが現世でやり残した事ってなんだったの？」
「え？ 秘密。あ……ココノエデース」
他愛もないいつもの会話に新鮮な風が吹き込んで来た。別の事を考えていたココノエは虚を付かれ、飾り気のない素の反応を示した。ユージにはそれが嬉しくて、もう一言だけ声を掛ける。
「その浴衣、とても似合ってるよ」
呆けた表情のココノエ。しばし呆気にとられた風で口を半開きにしていたココノエは、改めてユージを正面に捉えて不敵に笑った。
「バーカ」

煌めく後光を纏ってココノエは完全に消え去った。
ユージの仲間達は、今の瞬間をもってあちらの世界に戻っていった。
もう二度と現世の地を踏むことのない仲間達。一人また一人と、初盆の終わりと共に去っていった。
それでもユージは現世に残った。レイコと共に残りの人生を歩むために。

ナナコは云っていた。最初は相川氏と共に現世に留まっていたと。そしていつの間にか相川氏は姿を消して、自分だけが独り取り残されていると。
理屈は解らない。けれど、たとえばレイコがユージとの死別から完全に立ち直り、もうユージを必要としなくなった時、人知れず現世から去るのではなかろうか。それは些かの侘しさもあるが、レイコが強くなった証拠であるのだから喜ばしさの方が遥かに勝る。
いつになるか解らない。でも確信はある。レイコはきっと変われる。近頃のレイコの様子を見守っている限りでは、そう遠くない未来にゴロー達と再会する日が来るだろう。
少なくともレイコは日増しに人として成長している。ユージとレイコの間にある見えない糸の長さは、確実に長くなっているのだから。

テレビ番組で特集番組をやっていた。なんでも最近とある音楽家の遺作が発見されて、本人のものかの検証結果が出たらしい。
専門家が云うには、一部どうしても気になる部分があるものの、まず本人の作品で間違いない

との結果になったそう。

一ヶ所だけズレているように思える半音。意図的なのか、間違いなのか。とある音楽家の過去の作曲傾向と照らし合わせて、専門家たちは二択の議論を続けているらしい。

その事実を知り、有名楽団に奏でられた荘厳な音楽に耳を傾けながら、ユージは「あれ？」と苦笑するのだった。

思い起こせば色々な経験をしたものだ。

生前には予想も出来なかった二度目の人生。言うに及ばず充実していた。死の前も死の後も、どちらも変わらずに充実していた。

ゴローやココノエとの出会い。秘令選挙がらみの苦労は数知れないが、多くの時間が経過して一段落ついたら何もかも受け入れてしまう。

出会いと別れは表裏一体。一見では偶然の様に見えても、袖振り合うも多生の縁という言葉にある様に実は必然であったりする。そう考えると、人生は本当に解らない事だらけである。

ユージは今日もレイコの後ろ姿を静かに見守りながら、いつもの様に独り感慨に耽るのだった。

「あ。そういえば」

ユージは伝え忘れた何かを思い出す。

「小田氏。四部作映画の続編、まだやってなかったです」

誰にも聞こえない独り言をユージは呟くのだった。とな。

おしまい

初めまして。ペンネーム「TONA」です。適当ですが。

テーマ「風物詩」との事で、ふとお盆の事が思い浮かび、そのままぱっとシナリオが降りてきたので、じゃあということで文章にしてみました。拙い小説ですが、なにかしら楽しめる要素があったのなら幸いです。

構想は三日、あとは書きながらちょこちょこ。執筆期間は約二週間ほど。思いつきの勢いに任せて書き始めて、いのかにかこんな感じの仕上がりです。そのうち構想が固まったらゴロー編やココノエ編なども書いてみたいですが、いまは兎にも角にも自身の語彙力の無さが心残りですかね。うーん。

またの機会がありましたら。
ではでは～(≧▽≦)b!!

by. TONA

補足。登場人物のまとめ。（ネタバレ？）

ユージ：主人公。男性。本名、瀬川ユージ。良い意味の勘違いを周りに勝手にされる。交通事故に巻き込まれて死亡。現世に戻りたい理由は特に無い。

ゴロー：男性。偽名。主流派の党、筆頭候補者。微妙な擬音を用いる軽薄な口調。本名、桐沢カズヤ。元は会社の副社長。親友に刺殺され死亡。

現世に戻りたい理由は「ハードディスクを塩漬けにしてくれたか気になる」。

ココノエ：女性。ユージ達の仲間。棒読みで皮肉を言う。生前のゴローとは面識がある。元は資産家の令嬢。愛称「キューちゃん」。愛称で呼ばれる度に訂正する。

現世に戻りたい理由は「秘密」との事。生前より自由な事の全般に憧れる。

レイコ：女性。ユージの元恋人。ユージの死後、心神耗弱に陥る。本名、諏訪レイコ。黒髪ロングだったが、失恋後はぱっきりショートボブになる。ゆーれい、じこ。

ナナコ：女性。我が子の魂に引き寄せられて現世に残留する背後霊。守護霊を自認。

自称織姫。最愛の夫から毎年短歌が届けられる。死後も変わらず熱愛継続中。

参拝者：ナナコと相川氏の子供。母方の姓を名乗る。ユージに助けられて交通事故を免れる。

八木：男性。スケープゴート。会社上層部に圧力を掛けられ、突発的に親友を刺殺。

事件当時の記憶はほとんど覚えていないが、それでも深く反省し服役中。

来訪者：男性。幽霊。快樂殺人に身をやつす。現世に戻りたい理由は「人を殺したい」。

元は名医。あまりに多くの理不尽に見舞われた為、いつしか心が壊れて発狂した。

狩生：依頼主。ひたむきな才能。未完成の作品を完成させたい。

小田：依頼主。ネタ担当。映画の続きを教えて欲しい。

桐沢：依頼主。母の直感。息子の死を調べて欲しい。

上杉：依頼主。最後の一人。自分の代わりに墓参りをして欲しい。

相川：依頼主。不滅の愛。最愛の妻子に短歌を届けて欲しい。

寺本：依頼主。お茶目な道楽。隠し遺産の在り処を記す地図を描いて欲しい。

和泉：依頼主。有力派閥。仲間の仕事を手伝って欲しい。

諏訪：依頼主。子煩悩。孫の成長を見て来て欲しい。そして守って欲しい。

薄桃色の萌芽を浮かべた蓮池の水面に、曇り空がちらりと顔をのぞかせた。これから起こることを暗示するような、不気味な表情だった。

「小川さん、お茶が入りましたよ」

「はい」

返事をして、蓮池の後ろにあるテラスに振り向く。秋本陽子氏は曇りのない優雅な微笑みで私を見つめていた。テーブルの上には湯気をあげるティーカップが、それからチーズを乗せたクラッカーが大皿の上に並んでいた。

陽子氏と向かい合うようにして席に着く。彼女の視線から逃れるようにしてカップを持ち上げると、今まで嗅いだこともないくらいいい香りがして、口に運ぶのをためらわせた。

「遠慮しなくていいのよ、あなたは大切なお客様だもの」

「そのつもりですよ」

「ふふ、面白い子」

声をあげて微笑む陽子氏。

後ろでひとくくりにした柔らかい栗毛が、薄日を浴びてひかえめに輝いている。才色兼備、という言葉が、記憶の隅からこぼれおちてきた。なるほど、海外からも注文が殺到する売れっ子の画家で、その上これほどの美女ならば、才色兼備という言葉が彼女以上に似合う人間はいない。

「ここはご自宅ですか？ 別荘ですか？」

私は洋館の壁を見上げる。黄土色の壁は年代を感じさせず、神社仏閣のような佇まいだ。

「どちらだと思う？」

「別荘だと思います」

「ええ、当たりよ」

「私をここに呼んだのは、アルバイトにはここのほうが都合が良いからですか？」

私は、虚勢を張ってカップを傾け、それを置いて彼女を見つめる。紅茶は少し熱かった。

陽子氏は、微動だにしないまま、私の視線と真っ向から向かい合い、少女のような仕草で首をかしげた。

「私のこと、怖い？」

私は何も答えず、先ほどまで見ていた蓮池の水面に目を向けた。水面には蓮の葉の隙間からぼつりぼつりと桃色の花卉がその淡い色合いをのぞかせている。蓮は冬に咲くものだと思っていたが、そうか、蓮は七月に咲くのか。

「蓮は、夏の風物詩なの」

はっと息を吞んで振り返ると、陽子氏は私のカップに紅茶を注いでいた。このティーセットの総計だけで私のアルバイト代は軽く超えるに違いない。

「ひまわりとか、セミとか、海とかに比べると地味だけれど、こういう静かな風物詩も悪くはないでしょう？」

うっすらと潤う瞳に魅入られたまま私は頷いて、うっかり舌を火傷した。

そんな私を見て、彼女は小さく笑った。

私も、つられて笑った。

秋本陽子氏と知り合ったのはとあるインターネットの掲示板だった。掲示板があるサイト自体はごく普通場所だったのだけれど、その少しオカルトよきな掲示板に、「偏執狂」というトピックがあった。偏執狂について語ろう、という趣旨で、たまに見ると更新されていて、歴史上の人物、芸術家、文豪、その他もろもろの人物を偏執狂扱いしてはファイリングしていくという、厄介といえど厄介な、それでも地味に活動が続いているという点では真面目な場所だった。

ある日、日課のネット徘徊の途中そこに立ち寄ると、妙な書き込みがあった。曰く、「絵のモデルの女性を募集しています。年齢は十五歳、身長は百五十六センチ、頭髮は黒、都内在住で、夏休みにアルバイトをしたいと思っている方」ということだ。アルバイトの広告は禁止されているのですぐに消されてしまったが、仲が良かったこともあり、サイトの管理人に頼んで削除された部分を見せてもらい、書き込みからその人のメールアドレスを手に入れた。

メールをやり取りするうちに、相手が画家の秋本陽子であることが判り、私たちは七月の後半に一度会うことになった。

駅で彼女と待ち合わせをし、時間通りにバスのロータリーに彼女の黄色いフィアットが現れた。車から降りてきた彼女を一目見たとき、私の中に生まれた感情は、彼女の言うとおりの、確かに恐怖だったのだと思う。彼女の瞳が放つ光は、私のいる世界などとうに超越してしまった者の光だった。私は声も出せずに、彼女に誘われるまま車に乗り込んだ。

フィアットは町をぬけ、住宅街を横切り、森に入り、洋館の前で停車した。彼女の先祖はいわゆる斜陽族だったらしいが、こういった思い出の場所は売り渡さずに残しておいたらしい。奇特なことだ。

アルバイトの下見は、お茶を飲み、洋館の外と中を一周し、二人で料理を作って食べて、終わった。

目覚めは快適だった。高級品に違いないベッドのおかげだろうか。ここ二カ月は夢も見ず、寝汗にまみれて起きるのが常だったので、私は、つい、いつまでもここにいたくなってしまう。

ベッドだけでも持ちかえらせてもらえないだろうか、とか考えていると、寝室のドアがノックされた。返事をして開けると、陽子氏はトーストと紅茶をプレートに乗せて廊下に立っていた。

「おはようございます」

「おはよう、小川さん。入ってもいいかしら？」

この館の主は、律儀な人だった。

頷いて応え、彼女は私の部屋に入り、ナイトテーブルにプレートを置き、近くに椅子を持ってきて腰かけた。

「ここで朝食にしようと思って、持ってきた」

「まだ眠かったんで、助かります……けど」

私は自分がいまだにパジャマ姿であることを思い出した。昨晚、浴室から出ると、脱衣所に置かれていたものだ。下着も一緒に置かれていた。高級品ではなかったが、センスはいいと思った。

「もしかして、私のパジャマ姿が見たかったんですか？」

「ふふ、よくわかったわねえ」

子供をほめるような口調で言う陽子氏。一日一緒に過ごして判ったことだが、彼女には意外と子供っぽいところがある。

「それが体に合わないようなら、私の理想のモデルではないから」

トーストの上のバターをゆっくりと広げながら、陽子氏はそんなことを言った。私はベッドの縁に腰かけたまま、膝の上に皿を置いて、いちごジャムを塗ったトーストを手取る。まだ少し熱かったが、かじると、ほんのりとした甘みが寝ぼけた脳の奥にしみこんでいった。紅茶はまだ熱いだろうと思ったので、ナイトテーブルの上だ。

「陽子さん」

私は窓の外を見つめる。

「私のこと、サチ、でいいですよ」

「ほんとに？」

陽子氏はトーストを胸のあたりに持ち上げた姿勢で固まってしまった。

「ほんとにいいの？」

「え、ええ、構いません」

驚いている表情なんて初めて見たからか、少し胸が高鳴った。こんなに綺麗な人が驚いた表情を見せるのは、珍しい気がした。

陽子氏はぼんやりとトーストを齧ると、視線をベッドのシーツや窓の外へさまよわせ、ふふ、と微笑んだ。

「サチ、サチ」

口の端からパンの屑をこぼしながら、彼女は私の名を呼んだ。

「なんですか」

「重大発表があります」

「はあ」

私は呆気にとられたまま、彼女の次の言葉を待った。

「私のこと、陽子って呼んでいいわよ」

「はあ、そうですか」

「……嬉しくなさそう」

露骨に頬をふくらませる陽子氏。そんな表情は、今まで見たことがなかったので、少しだけおかしくて、私は笑ってしまった。

「わかりました、陽子さん、ごめんなさい」

「敬語もやめてくれたら許す」

「うん、ごめん、陽子」

私に名前を呼ばれたことがそんなに嬉しかったのか、陽子は頬を撫で、くすぐったそうに目尻を下げた。まさかこんな年上の女性を、しかも、私とは全く住む世界の違うお嬢様を呼び捨てにする機会が来るなど、思ってもみなかった。

「あ、今私のことおばちゃんだと思ったでしょう」

「ばれたか」

紅茶をすする。うん、良い香りだ。

「許して、陽子お姉さん」

「よかろう、許す」

「偉そうだなあ」

「年上ですから」

言ったそばから、陽子も私もふき出した。

洋館を出発したのは、十時ぴったりだった。陽子はバス停のロータリーで私を降ろして、窓から顔を出した。

「メールしたら、また来てくれる？」

「バイト代次第かな」

もう、と苦笑して、ふと、陽子は真面目な顔になった。

「ねえ、サチ」

「なに？」

手招きされ、窓に顔を寄せる。

私の唇に、甘い吐息がかかり、陽子の熱い唇が押しつけられた。

呆然とする私の目の前で、フィアットは煙を残して走り去った。

真夏の日差しにあてられ、唇に手を這わせると、蓮色の口紅が指に付着した。

かすかに、油彩の香りがした。

家の戸を開けると、腐臭が鼻腔を襲った。慣れない、この匂いだけは。

「おかえりなさい」

玄関に出てきた母が、その場に正座しながら言う。私に止まることを望んでいる視線には気付いていたが、その必要はない。私の足はすでに階段を踏みしめ、母の願いである、腐臭の元へと向かっていた。

「お兄ちゃん」

部屋の壁紙は白い。影を作らないように照明が設置されているので、一見、無限に白い世界が続いているようだ。その、真ん中。本来電灯がぶら下がっているべき場所に、何かが逆さ吊りになっていた。腐臭の元だった。

「幸、どこに行っていたんだい」

「別に。お兄ちゃんには関係ないよ」

宙吊りになった物を挟んで、私と兄は対面する。兄は白い木製の椅子に腰かけているので、ともすると脚を組んで宙に浮いているようだ。

「ん？ 今、ごまかしたね」

「……だから？」

「罪深い子なんだね、幸は」

冷たい声が、私の肌を突き刺す。肌が焦げるようにちりちりと痛み、目の前にいるのが人ではない、悪魔なのだと、教えてくれる。ひどく、今さらだけど。

やめてくれ。

「そういう子には育ててないつもりだったけど」

「お兄ちゃんに育てられてなんかない」

声が震えた。

「そうかなあ、そうなのかなあ」

「ひっ」

兄が椅子の上で指を動かした、それだけで、私は身をすくめてしまった。

判っているから、もう、やめてくれ。

兄の呪縛からは、私は逃れられない。

そんなこと、ずっと前から判り切ったことじゃないか。

「今日は、もういいよ。部屋にお帰り」

肩の力が、一気に抜けていくのが判ったが、そんなもの、次の奴の台詞で元に戻る。

「なんて、言うと思ったの」

「えっ……」

「君以外の匂いがするね、幸」

はっとした。デパートの香水売り場で試供品を使いまくって消したつもりだったのに、お見通しなのだ、奴には。

「嘘は最悪な罪だ。幸は罪人だから、清めてあげる」

兄がおもむろに椅子から立ち上がる。影が壁から天井に這いあがり、巨大な悪魔の姿を完全にする。

「来るな！ 悪魔！」

後ずさり、ドアノブをひねる。が、開かない。鍵は閉まっていないはずだ。何度もひねっていると、ドアの外から母の謝る声が聞こえた。母が泣きながらドアノブを押さえる姿を想像して、脱力した。笑えて来る。幸せなんて。

「幸、君は罪深いんだ」

ああ、できれば、今日いっぱいサチなんて、彼女以外には呼んでほしくない。

兄が腐敗した猫の死体を振りかぶるのが見え、私は目を閉じた。

思い出すのは、遠くて近いあの日々。

まだ、悪魔が私にやさしかったころ。

どうしてこうなってしまったのだろう、と何度も考えるが、その思考は何も生まない。

「幸は、周りの人に幸せを運ぶんだ。幸の名前は、僕が母さんにお願いしたんだよ」

混濁した記憶の中、その声だけが、やさしく響く。

もう元には戻らないと知りながらも、手をのばしては身を焦がす憧憬。

仏教では、徳を積んだ人間は極楽浄土で蓮の花の上に生まれかわるそうだ。

では、罪深い私は、どこへ行くというのだろう。

蓮池の下、更に下、不浄の血の池の中だろうか。

幸せなんて

曼荼羅の隅について

紅茶の染みみたいなものだ。

一切は空。

そういえば、辛いことなど。

朝起きると、ベッドの縁に腰かけて、手をぼんやりと眺める。そこにある感覚と、頭の中をぼんやりと漂う感覚を重ね合わせて、実感を得る。私は今日も生きていた。

キッチンを覗く。今日も母は帰ってきていなかった。三日前、買い物に出かけるといって以来、母は蒸発した。私は冷蔵庫から魚肉ソーセジを見つけて、素早く胃に詰め込んで家を出た。窓から兄の視線を感じ、早足で逃げた。

図書館に行き、お昼は水で済ませた。水が飲めるだけでも罪深いことなのだと、胸の奥で誰かが呟き、暗い気持ちで口をぬぐった。

ここ二週間ほど、陽子からのメールを無視していた。こんなに傷だらけの体を見せたくはなかったから。それでも陽子のメールは続き、この前のことで傷つけてしまったことを謝られた。私は、そのことは関係ない、とだけ応えた。それだけだった。

私はよく、捨てられた猫を見つけることがある。学校帰り、寄り道のつもりで遠回りをして帰ると、もうすぐ見つけるな、という既視感のようなものが胸の奥から浮き出てくるのだ。その日も、同じだった。帰り道、電信柱の影で、夕陽を浴びて鈍く光る眼差しを見つけ、よく見るとそれは子猫であった。子猫の入っている段ボールには「事情により育てられません。心のある方、育ててあげてください」と書いてある。灰色の毛並みと青い瞳で、血統書がついていれば良い値で売れるだろうに、どんな事情があるというのだろう。

子猫を撫でてやりながら、このまま帰らなかったらどうなるだろうと考え、我ながら愚策だと、失笑

してしまった。帰らないわけがない。私はあの悪魔の呪縛から永遠に逃れられないのだから。

昨日のことをいやでも思い出してしまい、お腹の皮膚が悲鳴を上げた。昨晚は、そこばかりを殴られ、蹴られた。じくじくと、傷口が傷んだ。何も食べなかった所為だろうか。気持ちが弱り、涙がこぼれた。

もう、いやだよ。

何度もそう呟いて、私の胸の中は張り裂けそうになった。

吐き気がしたが、えづいても、何も出なかった。

目を丸くした子猫が、にゃあ、と鳴いて、段ボールの箱から駆け出た。

慌てて振り返ると、先ほどまで人気のなかった道の真ん中に、黄色いフィアットが停まっていた。子猫はフィアットの脇に立つ女性の足元にすがりつき、女性が抱き上げると、心地よさそうに、にゃあ、とまた鳴いた。

幻だと思った。

「サチ、どうしたの？」

陽子が、そこにいた。

「家がこの辺りって聞いていたから、もしかして会えるかもと思って来たんだけど……ねえ、サチ？」

陽子は私に歩み寄り、膝を折って目線を合わせた。私が泣いていることに気づくと、猫を地面に置き、私の背中をさすった。

「どうして泣いているの」

「触らないで」

陽子の手を振り払う。手は簡単に私の背中から離れた。

陽子は目を細めた。半月前に会った少女と、目の前にいる少女が同一人物か、疑うような眼差しだ。その目を向けられることさえ、私には耐えられない。

「私ね、汚いの。罪で穢れているの」

「サチ、何を言っているの……？」

「昨日も、嘘をついたの」

涙を見られるのが恥ずかしくて、両手で顔を覆った。こうやって、たまに感情が溢れだして、止まらなくなる。自分に嘘をつくのにも限界があるのだ。

「この前は、心の中で友達を馬鹿にしたわ」

「サチ……？」

「その前は、蟻を踏み殺した」

できれば、こんな姿は見えて欲しくなかった。少しの沈黙の後、私は彼女の不意を突いて駆けだそうと起き上った。でも、陽子は私の手をつかんだ。罪深い私の手を。

「放して」

かすれた声が、やけに大きく聞こえた。

「放してよ、ねえ、陽子、お願い……」

最後のほうは、自分でも聞き取れなかった。

夕闇が訪れ、電灯が闇を照らすまで、陽子は私の手を掴んでくれていた。

「サチ」

「……なに」

「あの場所に行きましょう」

「……いいの？」

陽子は無言で私をひっぱり、助手席に座らせた。

「あなたも乗る？」

誰に言っているのか想像して戦慄したが、私の膝の上に子猫が乗って、安心した。

車は薄闇の中に光を放ち、町を離れた。

いつの間にか疲れて眠ってしまっていたらしい。目覚めは快適だったけど、闇の中だった。寝心地からして、ここはいつかの寝室なのだろう。起き上ると、肌寒かった。まさかと思って体を触ると、何も身に纏っていなかった。恥ずかしいと思うよりも先に、寒気がした。まさか、体の傷を見られたのではないだろうか。そうに違いない。それだけは、駄目なのに。こうならないように、私は精いっぱい気を張ってきたというのに。

電灯が灯り、私はとっさにシーツを頭からかぶった。

「おはよう、といっても、真夜中だけれど」

頬笑みとともに彼女は現れた。油彩の汚れを避けるためか、白衣を着ていた。

「私の服は？」

「捨てたわ」

「冗談は止めて」

「どちらでも同じことじゃない？ 今は必要ないんだもの」

こんなときにも関わらず、陽子はやさしい頬笑みを浮かべる。天使のような、不浄な頬笑みだと思う。その頬笑みに耐えきれず、私はシーツで体を覆ったまま、床に足をつけた。

「それじゃあ絵にならないわ」

「今から描くの？」

「そうよ。バイト代、はずませてもらうわね」

「そうじゃなくて……」

言い淀んでいると、陽子は私の身体を憐れいものを扱うような弱い力で抱きしめて、私の肩に細い顎をのせた。

「あなたに出会えた偶然に、私はとても感謝しているの。あなたは、今まで見てきた少女の中で、とびきり魅惑的」

「嘘よ、私に魅力なんて……」

「外見じゃないわよ。あなたの中から溢れるぞっとする魅力を、私は感じるの。あなたがあの書き込みを見つけていなかったらと思うと、本当に運命を感じるわ」

陽子は私の肩から指を滑らせ、シーツの端をやさしくつまみ、私を見つめる。その瞳にこもる慈悲の色に耐えられなくて、私は、頷きとも、俯きとも取れる仕草でそれに応えた。

嬉しかったのだと思う。

代替品としてでも、感情のはけ口としてでもなく、誰かに必要とされることが。

「綺麗よ、サチ」

シーツは無音で床に落ち、私の裸身は、彼女の前にさらけ出された。傷がどこにあるか熟知していた私は、傷口を彼女に見られている気がして、そこかしこから熱が出た。

「移動しましょう」

美術室、と古びたプレートが入口に掛けられた部屋に案内された。電灯が点いても部屋は薄暗かった。電灯の傘が埃が掛っている所為と、そこら中に物がひしめき合って、影を作っている所為だった。

影を作るそれらがすべて人の形をしていると気付いた時は、目を見張った。

「これ全部、人形？」

「リアルドールっていうのよ。大人のための着せ替え人形だったり、性処理用の玩具だったり」

そう言いながら、彼女は椅子に腰かけた。キャンバスはすでに準備されていた。私は近くにあった椅

子に座るよう促され、彼女と向き合った。

「理想の女の子がいらないなら作ればいいと思ったんだけど、駄目ね。一番理想に近かったのは、あなたの隣に座っているその子」

彼女の言ったほうに目を向けると、赤い着物を着崩して身にまとった少女が床に脚をのばしていた。人形だとわかっていても、一瞬、そのうつろな表情に引き込まれそうになった。

「球体間接人形っていうの。こう、関節を球体で繋げてあってね、リアルドールに比べるととても壊れやすいし替えが効かないけれど、いろいろな動きができて、命を持たせることができるの」

「命……」

「感情、かしら。でも、結局は偽物だったんだって、あなたを見たときに思い知らされた。これら人形の魅力を足し算しても、あなたの魅力にはかなわないんだもの。ちょっと、悔しかった……でもそれよりも嬉しかった。あなたを手に入れてやろうって、本気になった」

「そうですか」

「照れてる？」

「やめてよ」

陽子を見ると、悪戯っぽい笑みを返された。私も、小さく笑った。

久しぶりに、笑った。

「ほら、手をどけて。ちゃんとあなたを見せて」

準備が整ったらしく、陽子は鉛筆を取ってもどかしそうな表情をした。

仕方がなく、私は手をどけ、合わせた膝の上で重ねた。

「うふふ、そのウブな顔がいいわあ、とても」

「変態」

「ふふふ」

陽子はキャンパスに鉛筆を走らせる。しばらくのあいだ、部屋に鉛筆とキャンパスの布地のこすれる音が生まれては消えていった。

私の輪郭が、見えないキャンパスの表面に写し取られていくのが、空気を通して感じられた。時間の死んでしまった空間の中で、私の意識は人形たちと一体化し、私が人形なのか、彼女たちが人間なのか、境界が曖昧になった。

何故だろう、今なら、すべてをさらけ出せる気がした。

「私のお兄ちゃん、犯罪者なんだ」

「そう」

「お父さんを殺したの」

「……そう」

「小さい時から、あの人は異常だった。猫の死体をあちこちで見つけてきては、部屋に飾った。一時間も外を歩けば、必ず見つけて帰ってくるの。最初にお兄ちゃんの部屋に死体が飾られたのは、私が幼稚園で、あの人が小学四年生の時。お父さんもお母さんも、すごく怒って、止めさせた。あの人の部屋はふつうの小学生の部屋になった。でも、あの人は、止めたわけではなかった。私だけがそれを知っていた。クローゼットの奥に、たくさんの防腐剤と一緒に隠しておくの。狂っているでしょう？　こんなやりとりが五回はあった」

「偏執について調べていたのは、そのお兄さんを理解するため？」

「そうなのかもしれない……それで、最近になって、お父さんも異常に思ったらしくて、お兄ちゃんを精神病院につれていくって騒いだ。またあの人は、自分の部屋に飾りだしたのね。それで、お兄ちゃん、頭のねじが飛んじゃったみたいになって、猫の死体で、突然お父さんの顔を殴った。私はその様子を

、居間の入口から見ていた。お母さんが止めに入ったけど、高校生の腕力にかなうわけがなかったから。お父さん、鼻血まみれになりながら頑張ってたけど、最後は実の息子に命乞いをしてた。それで、あの人、最後は首を絞めた。お父さんの声が聞きたくなかった私は、それだけは感謝してる。それが二ヶ月前のこと」

うつろな気持ちで、私は口を動かした。彼女は何も言わない。ただ、慈悲に満ちた瞳で私を見つめ、私の輪郭をキャンバスに移していく。

「お父さんは今、お兄ちゃんの部屋にいる。壁に埋められているの。何度こすっても血が落ちないから、壁は天井から床までペンキで真っ白に塗ったわ。でも、もうすぐみんな気付く。会社からは毎日のように電話がかかってくるし、近所の人も、私たちを見る目の底に、探りを入れている。もうすぐ、私が殺されて、さすがにそれは隠しきれない。学校が警察に通報して、私の家は搜索される。そうしたら、あの悪魔の部屋から、仲良く壁に埋まった私たち父娘の腐乱死体が発見されて、おしまい」

涙が出ないのが不思議なくらい、胸が熱かった。

「陽子」

「なに？」

「抱いて」

陽子の手が止まる。

私たちは何も言わず、見つめ合う。

その沈黙の中で、私たちは無言を交わし合った。

「すべてが終わったら、そうしましょう」

「ええ、それでいいわ」

すべてが終わったら。

なんとも、甘美な響きではないか。

甘美なものほど、手が届かないというのに。

「今日はこのくらいにしておきましょう。服を持ってきてあげる」

下描きを終えたらしく、陽子は名残惜しそうに鉛筆をキャンバスに置いて部屋を出た。

私は近くにあった布切れで体を隠して立ち上がり、キャンバスを覗きこんだ。

そこにいた私には、どこにも傷がなかった。彼女の瞳に映る私は、きっと、こういうふうに映っているのだろう。そう思うと、嬉しくて、つい頬が緩んだ。そして、悲しくなった。

陽子が持ってきた服を着て、私はまた寝室に戻った。

「おやすみなさい、サチ」

「おやすみなさい、陽子」

自然な流れで、私たちは唇を重ね、別れた。

私は服を脱いで、冷たいシーツに丸まってベッドにもぐった。

一つの確かな覚悟を持って、私は手の中の感触を確かめ、瞼を閉じた。

夢を見た。

空はいつかの曇り空で、私は蓮の花の上に立っていた。

隣を見ると、穏やかに目をつむる陽子がいる。

反対側を見ると、安らかな顔で眠る兄の姿がある。

泥の中から今、私たちは顔を出す。

その姿は清浄で、一切は解き放たれた魂の産物だ。

ともに、どこまでも汚れることのないままに。

夢の中、私が最後に選り見たものは、陽子の笑顔だった。

陽子が寝室の扉をノックしたのは、まだ日も昇らない早朝のことだった。

「ごめんなさい、フィアットのタイヤがパンクしちゃったみたいなの。麓のバス停まで送って行くわ」
「歩いて？」

「そうなの、ごめんね。お腹すいてる？ 朝食を持ってくるわね」

さびしそうに微笑んで、陽子は扉を閉めた。

朝日が山の端から少しだけ顔をのぞかせたころ、トーストとハムエッグの乗った皿を二つ、それとティーカップを二つプレートに乗せて、陽子は部屋に入って来た。

朝食が済んで、紅茶を飲んで一息入れていると、陽子がぽつりと言った。

「サチ、ここで一緒に暮しましょう」

「……」

私は無言で応える。その質問は、予想の範囲内だった。

「ねえ、そのほうがいいでしょう？ 家に帰っても、いいことなんてないんでしょう？ それなら、私と暮しましょう」

陽子はベッドの端に手をかけ、私に顔を近づけた。その瞳は、今まで見たことのないくらい真剣さに満ちていた。

「そうなれたら、いいと思う……でも……」

しばらくの沈黙の後、私は、首を振った。

「駄目、そんなこと」

「どうして？」

「あの人は、逃げられないから。あの人は必ずここを探し当てる。そうなったら、あなたにまで……」

「この場所がわかるわけがないわ」

「判るのよ、あの人は、手段を選ばないの」

私はティーカップをプレートに戻し、立ち上がった。

「お茶、美味しかった。また来るわ」

無言で頷いて、陽子も立ち上がった。

館を出て、陽子の後を着いて歩いて行くと、しばらくして公道に出た。バス停はそう遠くないところにあり、運が良いことに、さほど待たずにバスは姿を現した。誰も乗っていないバスは乗車口をぽっかりと開け、薄闇の中に私を誘った。

「サチ」

陽子が私の服の袖を引っ張る。陽子のしたいことはわかっていたので、彼女の顔が近付き、唇が触れ合う瞬間、顔を引いた。

不安げな陽子の顔を見つめながら、私は彼女の唇に指を当てる。

生きて会えたら。

そう、思いを込めて。

「私も陽子に会えてよかった」

最後に私の記憶の隅に咲いたのは、初めて陽子と会ったあの日に見た薄桃色の蓮の花だった。

「次会うときにも、蓮の花は咲いてるのかな」

無理やりにでも微笑んで、私は言う。

「さよなら、楽しかった」

「サチ！」

悲痛な叫びを断ち切るように、音を立ててドアが閉まった。

雨が降り始めたのは、時計の針が午前十時を過ぎたころだった。蓮池に一瞬の水音が重なり、視界の中に爆発を生む。霞の中、薄桃色の花卉はその色と霞の白色との境界を曖昧にし、曇天の下に幻想的な調べを響かせていた。

家はとっくに燃え尽きたはずだ。火元のマッチはすぐにみつかるだろうから、人為的なものとわかるのも時間の問題だ。朝の出勤時間だったから、通報は早く、隣家への被害はないだろう。

蓮池の前に立つ私は、頬を打つ雨粒のひとつひとつを意識しようと、顔を空に向けた。もっと爽快感気分になると思ったが、意外にも、私の胸の中は、からっぽだった。

「サチ」

視界が薄桃色の傘の布地に覆われ、その下に陽子の顔が現れた。

「風邪ひいちゃうわよ」

陽子は片手で私の頭を胸に抱き、目を細める。私も彼女のぬくもりに触れたいと思い、彼女の胸に顔をうずめた。油彩の香りと、温かく湿った雨の匂いがした。

「死のうと思ったの。あの悪魔を包丁で突き刺して、そして、家と一緒に……」

「うん」

「でも、死ねなかったわ」

「うん」

陽子の腕がより一層強く私を抱きしめ、私は、何歳も年上の彼女を、心の底から愛おしく思った。私の言ってほしいことと、聞きたくないことを、陽子は知っていた。薄い沈黙を挟み、私の愛しい人は続ける。

「ニュースで見たわ。身元性別不明の、胸に包丁が突き刺さった焼死体が見つかったって」

胸の奥が音を立てて軋むのがわかった。そして、私にとって、兄の存在がどれほど強かったのかということも。

「でも、お兄さんを殺したのはあなたじゃないわ」

「え？」

わけがわからず、私は彼女を見上げた。

「だって、今……」

「ごめんなさい、サチ。私、あなたに嘘をついたの」

陽子は私に目を合わせると、言いづらそうに、間を置いて言った。

「車、パンクしたっていうの、嘘だったの。本当は、あなたに車を見られたくなかったから、隠しておいたの」

「見られたくなかった……？」

陽子は、蓮池を指差した。霞で見えなかったが、よくみると、泥の中に二つの轍が引かれていた。蓮池の中に向かって。蓮池は、そこだけ水草がつぶれ、ちょうど、そう、車一台は通りそうな空間を作り出していた。

「沈めたの？ あの人を……」

「ええ」

「リアルドールとあの人をすり替えて？」

「ええ」

雨は小雨に移ろい、陽子は私の視線から逃れるように傘を閉じた。

「ごめんなさい、私はどうしてもあなたを失いたくなかった。だから……」

陽子の焦燥に満ちた瞳が私に向けられ、首を振る。

いいのよ、もう。

これでよかったの。

「陽子」

「なに？」

「戻ったら、絵を完成させましょう」

雲の隙間から蓮池に八月の光がさした。蓮の葉の上に集まった水滴に光が反射し、蓮池の上に光が満ちる。とても幻想的で、涙も出ないくらい私を不安にさせる景色だったけれど、陽子の吐息を首筋に感じた私は、すぐにそれらから目を反らした。

解き放たれた魂は

幼い日の記憶のままに

極楽の蓮華の上に咲く。

穢れた身体も魂も

一切は空。

そう思えば、悲しい過去など。

満開の蓮の花が、唇を重ねる私たちを見て、薄桃色の花びらをひらりと宙に舞わせた。

「Lotus」――了――

諸注意

この雑誌に掲載されている作品に関する著作権は、すべて著者に帰属します。
ここで指す著者とは、各作品を執筆した本人であり、編集者を指すものではありません。
編集者は、『道人雑誌』に対してのみ著作権を有するものとします。

当雑誌に掲載されている作品を、無断で転載、使用、複製することを禁じます。
使用する場合は、必ず著者本人と連絡を取り、合意のうえで行ってください。

あとがき

当雑誌を読んでもくださり、誠にありがとうございます。

今回公開させて頂いたものが、第一号となっております。そのため、至らない点が多々ございますが、皆様からのご意見、ご感想などいただけましたら幸いです。

私自身、編者として雑誌を編集していく中で、様々気付かされる点がございました。また、企画の基礎が不安定で、作家の皆様にご迷惑をおかけしましたことをお詫び申し上げるとともに、当企画に参加してくださったことに、心より御礼申し上げます。

これから巻を重ねていくごとに、作家、読者の皆様と協力しながら、よりよいものを作っていきたいと考えております。ひとまずは、今回の第一号公開を記念して、関係者各位に感謝の言葉を述べつつ、また、読者の皆様に、次巻を期待していただけるような雑誌となっているよう祈りつつ、締め言葉とさせていただきます。

— 享楽 —